

# ある男の一生



田中 義明

## 目 次

はじめに .....	1
1. 幼年期 .....	2
2. 小学校時代 .....	4
3. 中学校時代 .....	10
4. 高校時代 .....	16
5. 大学時代 .....	26
6. 社会人時代	
その一 二十六歳まで .....	38
その二 能率協会時代 .....	46
その三 総合研究所（日能総研）時代 .....	49
その四 水問題研究所時代 .....	66
その五 一匹狼時代 .....	74
その六 思考技術開発時代 .....	80
その七 アート・サロン時代 .....	87
その八 リタイア時代 .....	95
あとがき .....	101
著者プロフィール .....	103

タイトル

『ある男の一生』

田中 義明

はじめに

これは毎日新聞の「自分史」の募集に応募するために書いた小品です。私は今年で八十五歳を迎えるお爺さんです。家内に「あなたの人生はそのままでも小説になる」とおだてられ、コロナ騒ぎで暇な時間の有効活用にと筆をとることにしました。

大学を出てサラリーマンになって、平和な家庭を築き、平凡でも幸せな人生を送ればと単純に考えていたのですが、運命の女神はそれを許してくれませんでした。仕事面では何回も行き詰まって転職し、最初の妻とは離婚し、身体のあちこちのガンで「今生きているのが奇跡」と医師に言われ、脳の病気で家内の顔も認識できない時期もありました。

このように言うと、よくあるお涙頂戴物語かと先を読む意欲を無くされてしまいがちですが、私の場合は、よき先人に導かれたり、幸運に恵まれたり、自らも努力したりして乗り切り、今年からは新たに若者たちにも参加してもらって地域に根ざしたライブハウスを立ち上げようと準備しているところです。人生の節々で書いた書物も十数冊にのぼり、それらの中からもポイン

トとなる部分を取り込んでいけば、この小冊子も読者の人生に参考になる部分がかかなりあるのではないかと思います。

## 1. 幼年期

私は1935年（昭和10年）に、八百屋と一文菓子屋を営む家の次男として生まれました。兄、姉各一人と妹二人がいましたので、五人兄弟の真中でした、父も母も大家族でしたし、裕福でもなかったのも、二人とも学歴は小学校まででした。

父の思い出はいろいろありますが、在郷軍人として銃剣術に励んでおり、鹿島神宮での千葉県の大大会では一位になり、陸軍富山練隊での全国大会では、現役の軍人を含めて二位となりました。それを表彰して天皇陛下から二重橋の大きな絵を授かりました。父としては実際には自分が一本を取って勝っていたのに、当時の陸軍は現役の軍人が在郷軍人に負けたのでは格好が悪いと父の一撃を一本として認めてくれなかったと残念がっていました。

父の思い出で忘れられないのが、独学で覚えたハーモニカの演奏です。ハーモニカはC調一本しか持っていなかったのも、ピアノでいう黒鍵に当る半音は出せないのですが、『ディアボロ』、『カルメン』、『荒城の月』、

『椰子の実』などを吹いて聴かせてくれました。しかもベース付です。父は東京に奉公に行っている間に自分で色々工夫して覚えていったと言っていました。ラジオも蓄音機も無い時代にたいしたものだと感心させられたものです。

母は千葉市の在の農家の長女で、愚痴一つこぼさず、ひたすら家業にいそしんでいる姿が思い出されます。私の家には、父の姉二人がそれぞれ男女の子供を引き連れて転がり込んできていたし、八百屋のお手伝いさんが、住み込みでいたので、全部で十三人が一つ屋根の下に暮らしていました。母はその大世帯を二人の小姑に囲まれながら賄っていたことを思うと、まさにスーパーウーマンでした。

私自身のことを少し書きます。幼稚園に行く前の私が鉄兜をかぶって日の丸を掲げている写真が残っています。それによると、幼い頃はかなり太っていて、母方のお爺さんから団子山と呼ばれていたそうです。きっと「お山の大将俺一人、後から来る者突き落とせ」という歌のように、近所の子供の中では餓鬼大将だったのではないかと思います。

幼稚園は、後に母校となる千葉高の近くにあった「自由幼稚園」に通っていましたが、そこで会った三幣君とは小・中・高・大学と一緒に、まさに生涯のお付き合いとなりました。彼は当時では珍しい三年保育で、「自

由幼稚園」の宝のような存在だったので、半年くらいしか通園しなかった私などは、隅の方で小さくなっていました。幼稚園では一度悪い思い出があります。昼食の時オシッコを漏らしてしまったのです。隣の席の女の子が、「田中君、お茶をこぼしてしまったのね、私が拭いてあげるわ」と言って雑巾を持ってきて床を拭いてくれました。私は濡れたパンツとズボンのままおもらししたことを、午後の時間隠し通すのに苦労しました。

幼児期の最後になりましたが、家が八百屋さんをしていたので近所のオバさん達が沢山買いに来ていました。たまたま私が店にいたのでしよう。母と後姿が似ている近所のオバさんが店に買いに来ていて、私は母に甘えるつもりで、そのオバさんのスカートをまくってその中に隠れてしまいました。そのオバさんはびっくりして「まあ、いやらしい子だと、どこの子かしら」と怒って言いました。

その時は母が平身低頭謝って難なくおさまりましたが、私の助平な性格はその後の八十年も続いており、どうも父からの遺伝のようです。

## 2. 小学校時代

私は千葉師範学校の付属小学校に通っていました。終戦は四年生の時

で、それまでは軍人さんが軍事教練と称して三～四人各小学校に派遣されて来ました。小学校低学年とはいえ、国を守る兵隊さんの「ひよ子」として厳しく躰けられました。勿論小学生だといっても、現在のように母親付き添いで登校するなんてことは許されません。兵隊さんに口答えしようものなら、胸ぐらをつかまれて何メートルも突き飛ばされました。私は生意気だったと見えて、よくその犠牲にされました。

これは。一つ仕返しをしてやろうと、母親がお嫁に来る時に持って来た姿見用の鏡に、太陽の直射日光を当ててその反射光を敵機襲来を望遠鏡で見張っている高台の兵隊さんに向けました。その兵隊さんは望遠鏡のレンズで眼をやられたのでしょう。その源<sup>みなもと</sup>をつきとめ憲兵隊の兵隊さんが二人我が家に取り調べに来ました。驚いた母親は、「年端もいかないう子供のいたずらですから何とぞお許してください。」とまたも平身低頭謝りましたが、戦時中ともあって許してはもらえず、私は憲兵隊の事務所に連れて行かれ、こっぴどく絞られました。

もう一つ母親に迷惑を掛けた話しをします。お店の二階の六畳間は、子供達五人の部屋になっていましたが、雨戸を閉めても節穴が空いており、その穴から竹鉄砲で外の道を歩く人を狙うことができます。竹鉄砲というのは、竹筒の穴の中に水を濡らした新聞紙を丸めてギュウギュウ

詰め込み、一回り細い竹の棒を使って新しい玉を押し込んで、先に詰めた玉を圧搾空気で打ち出すおもちゃの鉄砲で、子供達の戦争ごっこによく使われました。私が雨戸の節穴から外を見ていると、妙齡の和服の婦人が通りかかったので、チャンスと思って竹鉄砲を発射しました。すると運良くというか、運悪くというか、そのご婦人の顔に見事命中しました。その後はご想像のように、母親が平身低頭と相成りました。

私は母親に怒られるだろうと予想しましたが、一言も叱られず、父親にも伝えなかったようです。私は以後も一度も小言を言われたことはありません。

これは母親に内緒でやったことですが、終戦になり、街中をアベックが手を組んで歩くようになりました。私は隣に住んでいた

一歳上の悪餓鬼わるがきと一緒に何個かの石を持って物陰に隠れ、アベックに対して「この売国奴めばいこくど」と叫んで石を投げつけました。先方が怒って追いかけてくると、近所の地理に詳しい我々はうまく逃げおうせたものです。成人して自分もアベック位は普通にやっていたのに、終戦直後はアベックは西洋の悪しき慣習だと本気で思っていたのでした。

戦後になって学童達が混乱したのは軍国主義から民主主義に急転換したことでした。戦時中の子供達の服装といえば、半ズボンにゲートルに

下駄という全くちぐはぐなものでした。また天皇・皇后のお写真が校内の一部に設置された<sup>ほうあんてん</sup>奉安殿の中に飾られていて、その奉安殿から宮城の方をうやうやしく仰ぎ見るといふ行事が毎日強制されていました。

子供達の遊びは、戦争ごっこや、馬跳びなどから、母親達がつ作ってきた布製のボールを使った野球やドッジボールへと主流が変わり、進駐軍の兵隊さん達にお菓子をねだるために、プリーズ・ギブ・ミー・チョコレートなどという卑しい英語がはやりました。

私個人的には、学童疎開と称して母の里に姉と二人で預けられ、伯父がお百姓さんだったので、白いご飯をお腹一杯食べられたこと、近くの小川でフナなどの小魚を捕まえたことなどが楽しく思い出されます。疎開先の長男は既に戦死しており、<sup>こうたん</sup>講談本などを中心に沢山の本が残されていました。その中に何冊かのエロ本も含まれており、こっそり隠れて読みふけたものでした。

千葉の空襲の時には、家に帰っていたとみえ、父母と一緒に防空壕に避難していましたが、火勢が近づいてきたので、母に連れられて千葉中（今は千葉高）の校庭に掘ってあった「たこ穴」まで逃げました。翌朝家に戻ってみると、運悪く我が家まで焼け落ちて居り、コンクリートの建物がいくつか残っているだけで、周辺の景色は一変していました。そ

れから暫くは父が建てた焼けぼっくの柱と焼けトタンの家での暮らしになりましたが、子供達は環境の変化にもすぐ慣れるとみえ、私は焼け跡での宝探しが楽しみでした。収穫物はビー玉の代わりになる戦車や高射砲に使われていたベアリングや、鉛の管などでした。鉛は溶かして型に流し込んでベ一独楽を作りました。ビー玉もベ一独楽も当時子供達の間で大変流行していて、私にとってはとても貴重なものでした。

御他間に洩れず私達のクラスでも猿の集団と同様ボス争いがあり、最終的には千葉城の城主であった千葉氏の末裔<sup>まつえい</sup>を自称する千葉君が子分をうまく組織して安定政権を築き上げました。終戦前後には、よく他校から転校生が入ってきましたが、千葉君は子分達を使ってかなり厳しい「いじめ」を繰り返していました。これから度々登場する折原君も海辺に連れ出され、死ぬかと思うほど顔を海水の中に浸けられたということです。

私は父に自分より強い奴と喧嘩するにはどうしたら良いかを聞いたら、下駄を裏返して右手に持って殴り掛かると良いと教えてくれました。私は勇気がなかったからか、それを実行する機会は訪れませんでした。先日NHKのテレビドラマでデザイナーのコシノ三姉妹のお母さんが、カワイイ女の子の頃、年上の男の悪童共を下駄を使って散々やり込めるシーンがあり、家内と拍手喝采したものでした。

ある年の夏休みに、転校生の折原君が「担任の真行寺先生から休み中に一週間位遊びに来ないかと呼ばれているのだけど、君も一緒に行かないか」と誘われました。真行寺先生は柔道五段で、怒ると拳骨<sup>げんこつ</sup>が飛んで来て怖いけれど一方でとても優しいところもある先生だったので、私は刺身のつまでもいいやと思い一緒に房州の田舎までついて行きました。その時の一番の思い出は、先生と三人で鮒釣りをしたことです。その年は早魃<sup>かんばつ</sup>で田んぼはひび割れしていて、ちょうどその日に堰<sup>せき</sup>を開けて川の水を田んぼに入れる日で、川の水が動いて鮒が良く釣れるとのことでした。二十センチ位の大物を先生は二十匹位、折原君は二匹、私は一匹釣り上げ、早速先生のお家でそれらを甘露煮にして御馳走になりました。学校に弁当も持って来れない子がいるような食糧事情の悪い時代だったので、大変おいしかったことを今でも覚えています。

折原君は後に社会学のマックス・ウェーバー等の研究で東大の教授となり、いわゆる東大紛争の折には、学生側に立って東大総長等を批判し、頭が良いだけでなく肝も据わっていることを証明しました。私は折原君が真行寺先生の家に行くのに相棒として私を選んでくれたことが、今から思うと明確な目標ができたという意味で私の人生の転換点だったのだと感謝しています。

### 3. 中学時代

私の中学校時代は、健康にも恵まれ、やってみたかったいろいろなことにチャレンジできた幸せな時期だと言えます。ただ一方で何をやっても足元にも及ばないスーパー・スターが出現して、まさに屈辱くつじょくの日々でもありました。そのスーパー・スターとは既に述べました折原君です。

中学校になって、男女共学になり、千葉師範付属中学校は千葉大学付属中学校に昇格しました。そして若干の新入生を迎えてABCの三クラス編成になりました。そして折原君はB組、私はC組に入れられましたので、良かったのか悪かったのか、私は折原君の刺激を直接受ける機会は減りましたが、それでもクラスを越えた付き合いはいくつかありました。その一つがハーモニカです。

週戦後間もなくのことで、中学校の音楽の先生が全クラスの音楽の授業を受け持つことができなかつたので、千葉大学の音楽の先生が一部応援に来てくれて、私達の学年のB組とC組を担当してくれました。清水先生というのですが、戦争中現在のNHK交響楽団のようなところでファゴットという吹奏楽器を担当していたせいで、ピアノはあまり上手ではありませんでした。そのためB組とC組の音楽の授業では、生徒全員に

ハーモニカを買わせ、三年間掛けてハーモニカ・バンドを育成し、それを通じて音楽理論の基礎を叩き込み、歌を歌わない授業で子供達に音楽を楽しむことを教えました。清水先生は御自分のハーモニカ・バンドを持っていて、中学生からは折原君、長井君（若くして病死）、そして私を選んでそのバンドに入れてもらいました。私はバス・ハーモニカ、長井君はコード・ハーモニカ、折原君はかなり難しいソプラノ・ハーモニカを分担させられました。

メンバーは十人位で、高校の音楽の先生方や、プロ級の腕前を持つチェロの物理の千葉大教授などでした。毎週一回清水先生のお宅に集まって練習するのですが、何しろ千葉師範の学生寮の一室を改造して教授たちの住宅にしていた時代なので、メンバー全員が集まるとギュウギュウでした。ある時東京の日比谷公園にあった飛行会館というところで、NHKのオーディションがあったのですが、二時間位待たされるというので、中学生の三人はそれまでの間日比谷公園を散歩して来ようと会場を出ました。公園では進駐軍の兵隊さん達がソフト・ボールの試合をしていたので、私達はそれに見入ってしまい、会場に戻ってみると私達中学生抜きでオーディションは終わっていました。十人のバンドで三人が抜ければ音楽になりません。当然落選です。でも清水先生は私達を叱りま

せんでした。立派なものです。

それと前後して中学生のハーモニカ・ソロのコンテストがありました。地区予選があつて私も出てアメリカン・パトロールを吹いて二位になりました。という「<sup>すご</sup>凄いな」といわれそうですが、出演したのは折原君と二人だけだったのでビリだということです。ハーモニカは老境に入ってから再開しましたので後にまたふれます。

次は三年生の時の運動会でのことです。私はそんなに足の速い方ではありませんでしたが、どういう訳か紅白のリレーの最終走者に選ばれてしまいました。一～二年生が頑張ってくれて、私がバトンを受け取った時は十メートル以上相手を引き離していました。これなら間違っても勝利は間違いないと、ゴールを目指してひた走りました。ところがどうでしょう。ゴールまであと三十メートルという位置で観衆がワーワー騒ぎ出しました。変だなと思って後ろを見ると、何と折原君が私を抜き去ろうとしているところでした。

野球でも同じような結果に終わりました。折原君は不動のエースとして剛速球を投げていましたが、私は彼の練習用のキャッチャーとして昼休みによく座らされて球を受けて左手を腫<sup>は</sup>らせていました。正キャッチャーは幼稚園から一緒だった三幣君で私の正規のポジションはセンター

でした。対抗試合の時に、センター前ヒットが飛んできて、セカンド・ランナーを本塁で刺そうとバック・ホームしたら大暴投でその試合を落としてしまいました。

バレーボールも選手ではありましたが、私のエラーで負けた試合が結構ありました。

絵は比較的得意で花田先生のアトリエに通ってヌードなど先生と一緒に書かせてもらいながら、先生にアドバイスをしていただくという形で、謝礼はお店のさつま芋をふかしたものを持って行きました。食糧難の時代でしたので、奥さまには大変喜ばれました。花田先生は東京芸大出で作家の集まりである光風会の理事をしていましたが、私にも「芸大を目指したらどうか」と勧めてくれました。私は東京で開かれていた展覧会に何回か先生に連れられて見に行き、画家って格好いいし、一生好きなことをして生きていけるなんて楽しいだろうな、と甘い考えを持ち始めました。何よりも絵を習っているのは私一人で折原君を恐れる必要がありません。

もう一つ折原君関係の話をさせて下さい。三年生の時折原君は全校の生徒会長をしていました。私は青少年赤十字団の団長を任命されていましたが、私の学校ではボーイ・スカウトのような活動は全くしていません。

んでしたので、団長とはいっても何もやることのない飾りのようなものでした。ところが、青少年赤十字団の全国大会が開催されることになり、各中学校から一名ずつ代表を派遣することになりました。私は団長なんだから当然自分が派遣されるものと思っていたのですが、実際に選ばれたのは生徒会長の折原君でした。事前にも事後にも、先生方から私には何の話もありませんでした。先生方の間では田中では心許ないと、会議を開くこともなく折原君に決まりだという認識だったのだと思います。そうならば最初から私を団長になどしなければ良かったのにと、私は穴があつたら入りたいような<sup>みじ</sup>惨めな思いに陥りました。

ある年のお正月に、生徒の何人かが受け持ちの品川先生の家を招かれ、百人一首や麻雀をして遊んだことがありました。折原君はB組でしたが、品川先生が生物の先生だったので、その学問分野を通じて品川先生とも親しかったことから招待されたのです。C組では一番頭の良い務台君、二番の川口君など毛並みの良い人達が呼ばれました。恥ずかしながら、私はそれまで百人一首も麻雀も見たこともありませんでした。勝負は折原君の一人勝ちでした。驚いたことに、折原君は麻雀の盲ばいができる。麻雀のはいを見ることなく、それが何のはいであるかを親指の腹で<sup>さわ</sup>触るだけで当ててしまうことで、相当遊んでいる人でも難しい技です。

百人一首は折原君と務台君の決勝戦になりましたが、二人共上の句の一言を聞いただけで床に並べてある下の句のカルタを素早くはじき飛ばすのを見て、私は彼<sup>ひ</sup>が<sup>が</sup>の差の大きいのを嫌という程感じました。自分が八百屋の息子であることを悔やみ、自分の居る場所ではないので早くお開きにならないかと思っていました。

私の初恋も中学生の時でした。卒業の時、クラス全員の文集を作ることになり、その責任者として男性では私、女性では大村さんが選ばれました。皆の作文が集まって終わりというわけにはいきません。当時はガリ版を使って原稿を鉄筆で書き写し謄写版で印刷するという方法が小部数の印刷物では一般的でした。鉄筆で蠟を引いた原紙に原稿を書き写す作業は、狭い宿直室で高校入学前の春休みの一週間位を使って行われました。

子供とはいっても十五歳ともなれば思春期の真っ只中、六畳位の畳の部屋に男女二人が一週間閉じ込められていて何も起こらない方が不思議でしょう。鉄筆で書くのはある程度の筆圧がいるし、正座に慣れていないのであまり長く続けられません。「あーあ、疲れたー」といって二人で大の字に寝ころがることもしばしばありました。男性は長ズボンを履いていましたが、女性はスカートなので、ふくよかな足が丸出しです。

私の男性自身がムズムズしてきてつuitたずらをしたくなってしまいました。大村さんは一流会社の重役の娘とあって躰がしっかりされているのか、一定の線はきちんと守って私の暴走を許しませんでしたので、無事文集は仕上がりました。

#### 4. 高校時代

中学時代の秀才達は殆ど東京の有名な進学校（日比谷高校、教育大（今の筑波大）付属高）などに進学してしまったので、残るあまり出来の良くない生徒が千葉に残りました。千葉にも沢山高校はありましたが、兄貴も行ったし、歩いて十分という近さもあって県立千葉高校を受験しました。受験日は珍しく大雪で時間に間に合うように試験場に入るのが大変だったことを覚えています。会場は県立女子高校で正面の黒板には、先輩のお姉さん達が「ガンバレ」といろいろな色の白墨で書いてありました。受験生への暖かい声援だとは思ったのですが、受験生の中には他の中学校の生徒も混じっているのに私は茶目っ気を出して「ガンバレ」を「ガンジー」に書き替えてしまいました。私にはついやり過ぎてしまうような面があるのです。

無事千葉高には入れたものの、私にとっての高校時代はまさに暗黒の

時代でした。入学早々蓄膿症ちくのうしょうになり、千葉大学病院に一ヶ月入院ということになりました。我が家に同居していた従兄が千葉医専で同級生だったという北村教授を紹介してくれて執刀してもらったお陰で順調に回復しました。一ヶ月間寝っぱなしで退屈してしまい、担当の看護婦さんにチョッカイを出すと気に入られてしまい、退院後家に来るということになってしまいました。彼女は私よりかなり年上だったので、一度は家に来ましたが、何事もなく済みました。入院していた同室にソニーの社長でバリトン歌手でもあった大賀氏が一緒だったことを覚えています。

蓄膿症ちくのうしょうが治ると、次いでジフテリア、中耳炎、トラフォーム、扁桃腺、尿閉、痔と穴という穴の病が続き、何と自分についていないのだろうと世をはかなんだものでした。

ところが運命の女神はさらに厳しく私に攻めて来ました。一通り穴に関する病をやり過ぎしても、七～八度という微熱がいつまでも続きました。校医でもある柏戸先生に診断して貰うと肋膜炎に軽度の結核が発症しているというではありませんか。入院がベストだけれど、投薬と自宅療養という方法もあるとのことでした。両親に話すと、「八百屋を継ぐのであれば学力は中卒で十分だから安心して静養したら良い」と慰められました。結核といえは多くの小説家などが罹るインテリの病で、当時「死

に到る病」として恐れられていた病です。

八百屋になるという最低のシナリオは保障されながらも、東京の高校に進学した折原君や務台君のことを思い起こすと、このままでは終われないという競争心がむらむらと湧き上がってきたことも事実です。

もう無理は出来ない身体になってしまったので、入学時に入部したバレーボール部に退部届を出し、体育の授業は全て見学にさせてもらうことにしました。

体調の良い日は登校するのですが、そうすると授業内容が断片的で繋がりが悪いので学習参考書で勉強することになりました。これならば先生の解説部分も書かれているし、読むスピードを調節すれば直接授業を受けるよりも理解が進むということも分かりました。

私が大学まで狙っていると知らない母親は、店が立て込んでくると私を呼びよく店の手伝いをさせられました。屈強な住み込みの女中さんがいたので、重い野菜の配達には彼女が担当してくれたのですが、軽い野菜の近所への配達には私が自転車で届けることができました。千葉高方面への配達で、それが高校の下校時間に重なると、私を見て生徒達が「八百屋の小僧、八百屋の小僧」と合唱してひやかしたものです。私は何としても大学にはいきたいと思いました。

幼稚園から一緒だった三幣君は千葉高に入って相撲部に入部しました。身体はもともとガッチリしていましたが、相撲部となるとやや小柄でした。私は彼がいろいろな大会でどんな成績だったのか未だに知りません。大きな賞を取っていれば噂になるだろうと思っていたからです。ただギターだけは上手でした。私もギターが欲しかったのですが、買ってもらえませんでした。ところが幸運にもギターが手に入ったのです。中央大学法学部に進んだ兄貴が、どこからお金を調達したのか、ちやちながら本物のギターを買ってきたのです。兄はアルバイトをしていなかったの  
で、資金源はお店の売り上げしかありません。昔は小さな商店は、売上を天井からぶら下げた籠に投げ込んでいました。家の者がそこから少しずつ抜き取っていても、母には分りません。両親は兄を追求しませんでした。兄は、手に入れたもので暫くは遊ぶのですが、すぐに厭あきて放り出してしまいます。

私はチャンス到来とそのギターで退屈な日常から少しでも抜け出そうと、三幣君に手ほどきを頼みました。当時は古賀メロディの全盛期で、「影を慕いて」、「酒は涙か溜息か」、「丘を越えて」などを教わりました。中学時代からやっていたハーモニカを辞めてしまったのは、高校生になってみると、ハーモニカは楽器として十分でなく、小・中学生の玩具おもちゃに過

ぎないと思ってしまったからです。高校二年生の時三年生を送り出す会  
が講堂で行われましたが、その時三幣君とギターの二重奏でショパンの  
「別れの曲」を弾きました。曲が終わると、二年生の一人が乱入してき  
て、三幣君のギターを奪ったかと思うと、いきなりフラメンコの賑やか  
な曲をジャカジャカ弾き出しました。失礼な奴だとは思いましたが、我々  
の演奏より彼の方が三年生に受けていたので、我々は黙って引き下がり  
ました。

私は未だに写真が趣味ですが、これも高校時代に始めたものです。兄  
貴が例の通り店の金をくすねてカメラと引き伸ばし機を買って来ました。  
そして暫く遊んだ後で手離して私のものになりました。お侍さんは新し  
い刀が手に入ると試し切りをしますが、私はその写真機で試し撮りをし  
たくなったので、クラスの可愛い女の子二人を誘って千葉城のあるいのはな亥鼻  
公園で試し撮りをさせてもらいました。そのうちの一人は中学から一緒  
だった松谷さんで、今でも本格的に写真を撮っていて、去年私が経営し  
ているアートサロンの写真展にも出展してもらいました。

私は病気のこともあり、家の財政状態のこともあって一発で合格しな  
かったら八百屋を継がされると、受験校は早めに決め、試験科目や配点  
のウェイトまでチェックし、一直線で合格に向けて突き進むことにしま

した。そして試験科目の少ない慶応と一橋に決めました。

慶応は英、数、社、理一科目、国の計五科目、一橋は慶応に一～二科目追加されますが東大の計八科目よりは楽でした。そうになると理科の物理はいずれにしても受験とは関係なくなります。千葉高の物理の先生は、東大出でサッカー一部のコーチをしていた素晴らしい先生でしたが、私は物理のテストで白紙の答案を出しました。試験後教員室に呼ばれ、何故白紙で出したのか問われたので、正直に大学の受験科目にないし、病気で理科の三科目全部を勉強する余裕がないことを説明しました。先生は了解してくれて「次からは間違いでもいいから何か答えてくれ、これでは私の出題は答える価値もないということになる」と言われました。私はそこまでは考えていなかったのが恥じ入りました。

数学の時間のことでした。先生は大学教授を定年退職した後のアルバイトとして教えている方で、つい興に乗ると高校のレベルを越えて難しい数式を黒板一杯に展開していきます。私は大学受験に関係ない授業は無視する方針だったので、先生が黒板に向かっている間にこっそり抜け出しました。うまくいったと思ったのですが、後でその授業に出ていた三幣君に聞くと、先生が「私は出席をとる訳ではないので、抜け出すことは自由だけれど泥棒猫のようにコソコソ逃げるのではなく、一言挨拶

して堂々と出て行って欲しい」と皆に言われたそうです。私はそうすべきであったと恥じ入りました。

もう一つの失敗は音楽の時間に起こりました。音楽は大学受験に全く関係がないので私が一番軽視していた科目でした。ある時、先生から各人一曲ずつ作曲して提出するようにと宿題が出ました。私は多少ギターをやっていた関係で楽譜は色々なジャンルの楽譜を持っていたので、クラシック専門の先生は絶対に知らないだろうと思われるカウ・ボーイ・ソングをそのまま写し取って提出しました。次の音楽の時間に良く出来た作品だけ弾いて聴かせるという先生が最初に弾いたのが、私の作品とされるカウ・ボーイ・ソングで、荒涼とした草原の感じがよく出てくるとのお褒<sup>ほ</sup>めの言葉まで頂いてしまいました。私は恥ずかしさに顔を真っ赤にして俯<sup>うつむ</sup>いていました。

以上のようにして受験対策一本に絞っていたので、各学期末の期末試験の結果は惨憺<sup>さんたん</sup>たるものになってしまいました。三年生になるとビリから数えた方が早いところまで落ち込んでしまいました。受験期が近づいて来ると、学校でもその学期で教えた内容と関係なく大学の試験を想定した「実力試験」という試験が行われました。私はそれを目指して勉強して来ましたので、しくじる訳にはいきません、結果は八クラス全員の

名前入りで上位から順に廊下に張り出されました。実力試験は三回位行われましたが、私は一度は一番で悪くても五番までには入っていました。

いよいよ卒業という段階になって、職員会議では私の出席日数が足りないので、このまま卒業させるのはどんなものかということが議論されたそうです。その時各学年で私の担当だった三人の先生方が、実力試験の成績からは高校の教育内容は十分に理解しており、もう一年留年させるのは意味はないのではないか、と私を弁護してくれて無事卒業が出来た、という裏話を担任だった先生から聞かされて冷汗をかきました。

さていよいよ本番の入学試験です。最初は慶応でした。二日目であと国語の一科目を残すだけという所で急に胸が痛み出し、息苦しさを感じました。これはただ事ではないと国語の試験の途中で医務室に行きました。すると「直ぐタクシーで帰って校医の先生に診てもらいなさい」とのことでしたのでそれに従いました。校医の柏戸先生の所にタクシーを乗りつけると幸い先生が病院に居られてレントゲン等の検査をして下さいました。診断結果は「自然気胸」で肺と肋膜の間に空気が溜まって息苦しくなったとのことでした。入院して空気を抜きさえすれば、元に戻るとのことでしたので安心しました。

一安心ではありましたが、数日後には一橋の試験があることを先生に

伝えると、「今年は諦めなさい」と言われてしまいました。仕方なくそのまま入院して何回か大きな針を胸に射して空気を抜くと若かったせいか肺が膨らんできて大分呼吸が楽になってきました。その時先生が言いました。「田中君、試験場の雰囲気だけでも見てこないか、私が一緒に行つてやるから」と言われました。とは言われてもそれは試験前日の夕方でした。

私には浪人すれば八百屋を継ぐという考えしかありませんので、先生の親切な申し出にチャンス到来と合格するつもりで会場の国立くにたちに勇んで先生と行ってみると、大学の周辺の宿屋はどこも満室で泊めてくれません、「松風」というパン助宿が試験場のすぐ近くにあり、空いているということが分かり、選択の余地はなくそこに泊ることにしました。部屋にはピンクのカーテンが窓に下がり、ダブルベッドがあり、英語の歌が流れていて、前日にはここでアメリカ兵と日本女性があることをしていたことが十分に想像できるあや怪しい雰囲気でした。このダブルベッドに先生と二人で寝るのではとてもゆっくり眠ることなど無理だと思いました。しかし仕方がありません。

翌日は寝不足のまま試験会場に入りました。休憩時間に先生に栄養剤などの注射をしてもらいながら一日目をやっとなしました。二日目の

晩も、疲れているのに眠れません。翌日ふらふらと試験場に入ると、私の隣の受験生が「具合が悪そうだけど大丈夫ですか」と優しく声を掛けてくれました。私が正直に事情を話すと同情してくれて、「もし二人共合格したら仲良くしよう」と励ましてくれました。鳥取県の米子市から来た永瀬君という人で、それが機縁<sup>きえん</sup>で生涯を通じた友となりました。

ボクシングでも最終ラウンドはどんなに疲れていても戦えるものだと思いますが、あと一日死にもの狂いで頑張ればよいと思ったら実力以上のエネルギーが出て来て、慶応の時のように最終科目を投げ出すようなこともなく試験を終了することができました。

千葉に帰ってまた暫く入院となりましたが嬉しいことに、特効薬のなかった結核にストレプトマイシンという画期的な薬が開発され、私も健康を取り戻せる見込みが出て来ました。そして試験の結果は両大学とも合格でした。

余談になりますが、私の受験事情を知っている受け持ちの先生が後輩達に話したのだらうと思います。一年後輩の高校生と母親が連れ添って何組も我が家に来て、私に受験のコツを教えてくれと頼むのです。「私はたまたま運が良かっただけだし、受験一本に絞った私の行き方は後輩の皆さんにはお薦めできません」といって何とか身をかわしたものでした。

## 5. 大学時代

大学時代は結核もほぼ完治し、私も一般の学生並に学生時代を大いに謳歌できました。まず楽しく思い出されるのは、東京女子大で催されていたダンス教室に夢中で通ったことです。女性は東京女子大と津田塾大、男性は東大と一橋大に限って東京女子大の体育館でレッスンが行われていました。私は国分寺に下宿していましたが、ダンスのレッスン日は欠かさずに西荻窪の東京女子大に通いました。ダンスそのものにはあまり興味はありませんでしたが、女性という神秘的な存在に魅かれていたのだと思います。何てことはない単なるガール・ハントでした。

社交ダンスには、スロー・フォックス・トロット、クイック・フォックストロット、ワルツ、タンゴ、ルンバ、マンボ、ジルバ等何通りかありますが、私が一番好きなのはタンゴでした。男女が身体を密着させている上に、男性の右の太股ふとももが女性の二本の太股の間に深く入り込むステップが多いので、タンゴを踊ると私の男性自身がむくむく大きくなるのを抑えられませんでした。

集団レッスンなので、男女共素敵なパートナーと組みたいと思うのは当然です。しかし先生はそれを許しませんでした。一曲踊るごとに男女

をバラバラにし、それぞれ向き合って整列し直してから、正面になった男女が次の曲のパートナーになるのです。私は気に入った女性には、踊っている間に何番目に並んでくれるように頼んだのですが、後から並んだ人が両サイドに加わるので、なかなか思うようにはいきませんでした。また会いたいと思った人には、一曲踊っている間にデイトの約束を取り交わす必要がありました。何人かには「都合がつかない」と言われてしまいました。それでも路上などで女性を誘うよりも確率良くデイトの相手は見つかりました。

私は結核が治ったとはいっても運動部に入るのには自信がなかったので写真部に入っていました。当時はまだカメラが一般化していなかったので、彼女達に公園などで写真を撮ってあげると大変喜ばれました。私は自分で誘っておきながら、深い付き合いになることは危険だと本能的に思っていました。デイトをした女性のコレクションをしていたようなものです。多くの女性の写真を小さなアルバムに貼って友人達に見せては自慢するのが楽しみでした。友人の中には既婚女性の千人切りを目指しているとか、大晦日まで女郎屋にしけ込んだといったことを自慢する豪の者もいましたが、私はそういうことは汚らわしい感じがして興味が持てませんでした。

やがて私のダンス経験が活かされる時が来ました。一年生の秋、小平分校で恒例の文化祭の時に、田中にインディアンのダンスを工夫してもらい、皆腰蓑<sup>こしみの</sup>をつけ、裸で槍を持って踊ろうということになりました。私は早速マンボやルンバなどラテン系のダンスを組み合わせ、インディアン・ダンスを創作しました。昼休みにクラス全員が校庭で輪になって、私が中央で見本を示してそれに倣って踊って貰いました。どこからか太鼓を借りてきて私が太鼓でリズムをとると、何とか様になったので本番を待つことになりました。

当日は、全員パンツ一丁になり、墨で身体中を塗りまくり、腰蓑をつけて校庭で一踊りした後街中へ繰り出しました。結果は大好評で、分校長から表彰状を貰いました。

一橋大学の本校は中央線の立川と国分寺の間にある国立駅の近くにあります。一・二年生の通う分校は、国分寺駅から出ている私鉄の多摩湖線の小平駅の近くにあります。小平分校校庭の奥から小川沿いに小路が津田塾大まで続いており、寮に入っていた某君などは、夜津田塾の寮に忍び込んで一発やってきたなどと自慢していましたが、これはちょっと信用できません。同じく寮生だった竹内君が野良猫を捕まえて食べていたという話は、当時の食糧事情と彼の日常の言動からして本当かも知れま

せん。

分校時代全校で二人しかいない女性の学生が二人共私のクラスに居ました。後に大学教授になったようですが、女性の一人に「ドイツ語の単語帳を貸して欲しい」と頼んだら「テキストに辞書を引くような単語がありましたか」と返されて大変恥ずかしい思いをしたことがありました。私は下宿をしていたのですがたまに家に帰る度に切符を買ってはいはもったいないと千葉から西千葉までの定期と国分寺から小平までの一ヶ月分の定期を買い、いわゆる「キセル」をすると同時に、期限が切れるとその二枚の定期の有効期限の部分だけ切り取って、友人の期限切れの定期から数字を切り取って埋め込み期限を延長しました。その改造した定期を友人達に見せて「どこか変か」と聞いても誰も気付かなかったので、その方式を四年間続けることにしました。

一年生の時は社交ダンスに明け暮れましたが、二年生の時は本格的にギターを習い始めました。兄のお下がりの安っぽいギターでなく私自身のために父に頼んで買わせて貰った当時の価格で二十万円位した手作りのクラシックギターでした。ソルとかモッツァルトなどの堅い曲ばかりでなく、「禁じられた遊び」とか「アルファンブラ宮殿の思い出」などのお馴染みの曲も<sup>くしま</sup>玖島先生は教えてくれました。下宿の二階の窓辺に腰

をおろし、夕方女子大生が帰宅する時間を見計らって甘いメロディを奏  
でました。こちらの下心を知ってか、まったく無視して通り過ぎる女子  
大生がほとんどでしたが、中には見上げてにっこりと微笑んだり、拍手  
を送ってくれる女子大生もいて、ダンスに替わるガール・ハントの方法  
が見つかりました。

ここで私は生涯にわたる大失策をしてしまいます。窓辺のギターで知  
り合った平賀さんという津田塾の女性と日光に日帰り旅行をしてしまっ  
たのです。泊まったわけではないので肉体関係はなかったのですが、都  
内の公園巡りとは一ランク違うデートになってしまったことは事実です。  
帰って直ぐ「とても楽しかったので、今度は泊まり掛けで旅行しましょ  
う」という手紙が来てしまいました。私は「しまった」と思いながらも  
相手を傷付けまいとあいまいな表現で返事を書きました。一度火のつい  
てしまった彼女の気持ちはそう簡単に消えません。そのうち私の実家に  
まで行きたいというところまでできてしまったので、私は「貴女をそんな  
に好きではない、単にガール・フレンドが欲しかっただけだ」という  
内容のやや突っぱねる意地悪な手紙を出したりしました。その後音沙汰  
がなかったので一件落着かなと一安心していると、下宿で同室の先輩  
ふでうち筆内さんから「重大な話があるから喫茶店に行こう」と誘われました。

何事だろうとついて行くと、「今日平賀さんと会った。田中君とのことで彼女は睡眠薬自殺を図った。幸い未遂に終わったが、大変なことになるところだった。田中さんて本当はどういう人なんですかと聞かれて困った。以後慎重に行動するように」と厳重に注意されました。私は本当に迂闊<sup>うかつ</sup>だったと強く反省しました。筆内さんは野球部の四番バッターで、富士銀行に就職し、富士銀からのイギリス留学で博士号をとり、晩年はエプソンに移り専務になった人で、現在はアムステルダムで老後の生活を送っている私の尊敬する先輩です。

ここからは大学生生活の後期に入ります。私が三年生の時、幼稚園から高校まで一緒だった三幣君が一橋に入ってきました。私は歓迎会を兼ねて二人で北海道旅行をしようと誘いました。話はすぐ決まり、ある日上野発の夜行列車に乗り込みました。当時は新幹線はなく、立ちん棒で青森まで行き、青函連絡船に乗り換え更に四時間立ちっぱなしで、函館から札幌までの汽車の座席をやっと確保したところで隣を見上げると、姉妹らしいきれいなお嬢さんが二人立っているではありませんか、ここで席を譲らなければ男が<sup>すた</sup>廃るとばかり、三幣君と目で合図し一斉に立って「どうぞ」と席を譲ろうとしましたが、最初は遠慮して座ろうとせませんでした。そのうち「交代で座りましょう」ということになって札幌ま

で行きました。

翌日は四人で札幌を観光し、そこからは観光先が異なるので別れました。一週間くらいして千葉に帰ってみると、二人のお嬢さんのうちのお姉さんから手紙が来ていました。私が気に入ったのは高校生の妹の方だったので、そつのない手紙を返しておきました。

後期にはクラスというものはなくなり、ゼミ単位でまとまって勉強することになります。私は古川ゼミに入り、経営学を専攻することになりました。ゼミには幹事という世話役が必要なのですが、どういう訳か私が選出されてしまいました。ゼミのメンバーは教授の人気によっても違いますが多くて二十人位です。幹事とはいっても、仕事は雑用です。その中でも年に一回のゼミ旅行の事前準備が一番重要です。何しろ旅先で全員が抱けるだけの女性が調達できるかどうか幹事の腕前とされるからです。

何しろ宴会が終わると学生達はこそこそ自分の宿を抜け出し、翌日の朝食までには全員自分の宿に何食わぬ顔をして戻って来ます。何も知らないのは先生だけです。そういう状況ですから幹事が自分の宿に留まっていたのは格好が悪い訳です。他の人達は前期の頃から新宿二丁目や吉原などの売春婦を相手に童貞を失っていたと思いますが、私はゼミの幹事

という役柄上やむを得ずゼミ旅行で売春婦に童貞を捧げました。

ゼミの授業内容は私にとってあまり面白いものではありませんでした。ある時先生の考えについて私が批判的な意見を述べました。そしたら先生は「田中君、私はこの研究を二十数年もやっているんだよ。批判するのははまだ早いのではないか」、先生は財務統制論というお金の流れを見て企業の経営をコントロールする仕組みが専門領域で、それに関する本も何冊も書いていらっしやいます。そのこと自体は大したものだと思います。しかしそれらの本を全部読んでもどうも具体的な方法が見えてこないのです。沢山の本は殆ど内容が同じで、しかも一冊の中にも同意反復どういはんぷくの部分が多く、ページ数がいくら多くても、あまり内容が深まっていなように思いました。

ゼミの授業で記憶に残っているのは、一本の煙草が短くなると、次の一本を箱から出して前の煙草から火を移すという仕草を、ゼミの間中やっている先生の姿位なものです。

卒業後のことになりますが、先妻との結婚式で私はお呼びしたくはなかったのですが、親類の人達から、大学の先生を主賓に招くべきだと強く言われ、仕方なく主賓としてご招待しました。その主賓挨拶で「田中君はカミソリのように切れるけれど、もっと鉈のようにならなければ世

の中は渡って行けない。人間関係に問題がある」と指摘されてしまいました。私はその祝辞に反発し、ますますカミソリの刃を磨いていこうと思いました。

ゼミの関連で言えば、もう一つ忘れられない思い出があります。それは三商大の発表討論会に経営学部門の一橋代表として私が選ばれたことです。三商大とは今の一橋大学、大阪市立大学、神戸大学です。私は発表する論文の参考にしようと、当時一橋大学で名講義をする教授として有名だった藻利先生の著書をお借りしたいと直接先生にお願いしました。約束の日は猛烈に寒く雪がパラついていました。私は校門の前で先生をお待ちしていましたが、時間になっても先生は現れません。十分位過ぎた頃、駅の方から走ってくる高齢の人が眼に入りました。近くになってそれが藻利先生だと分かりました。先生は「すまん、すまん、電車が遅れて遅刻してしまった」と言って御自分の「経営学の基礎」という本を貸して下さいました。学生のために雪の中を走って届けて下さった藻利先生の好意に感動し、藻利ゼミに入れば良かったと思いました。

私が三商大の発表会で発表するというので古川教授に言われたのか、当時講師をしていた雲島先生が私につきっきりで指導して下さいることになりました。「のんべい大学」という荻窪駅の近くにあった汚い居酒屋の

小さな畳の部屋で、先生と向かい合ってビールを飲みながら議論をしました。テーマは三商大の参加メンバーが共通に討議に参加できるように、経営学の神様として当時大きな書店では店頭には山積みされていたユダヤ系アメリカ人学者ドラッカーの「現代の経営」という本を批判的に読むということにしました。そして先生と私で知恵を絞って一つの論文を書き上げました。一週間位通った居酒屋のビール代等は、雲島先生が少ない給料からおごってくれました。雲島先生はその後一橋大学の教授となられ、先生のゼミの卒業生が雲島先生の紹介状を持って私の家を訪ねて来たりしましたが、それは後述します。

三商大の討論会は大阪市立大で行われました。私のドラッカー批判は好評でしたが、その後の討議になって私はまごつきました。大阪市立大も神戸大も関西弁丸出しで、「あんたはん、そない言いはりますがな一、こな考えもあるとちやいますか」とやられるとこちらは途端に力が抜けてしまいました。何はともあれ会は無事終わり、打ち上げも済んで学生達は親睦を兼ねて大阪ミナミのストリップ劇場に繰り出しました。東京と違いバタフライも付けずに女性自身の奥まで見せる踊り子達の大胆さに呆れてしまいました。

わいせつな話のついでに、一橋大学の学生達がよくコンパの席で歌っ

ていたわい歌を少しだけ紹介しましょう。

一つでたはなよさほいのほい。皇后陛下とやる時にゃほい、直立不動でせにゃならぬ。よさほいほい。

二つ出たはなよさほいのほい。質屋の娘とやる時にゃほい、入れたり出したりせにゃならぬ。よさほいほい。

こういうのがいくつも続くのですが、立派な山田耕作作曲の校歌があるのにもかかわらず、こんなわい歌を高唱して喜んでいたのですからたわいもないものです。

大学を出たら大学院に残る人は別としてどこかの会社に就職することになります。現在のように三年生から就職活動をするということはありませんでしたが、四年生の中頃からゼミの仲間達もそわそわし出します。私はゼミの幹事ということで、古川先生に最初に呼ばれ、先生が会社側から学生の斡旋を依頼されているいくつかの会社のどこかに行くように言われました。私は先生のコネで就職するのは嫌だったので「自分で探しますので結構です」と断ってしまいました。先生としては、こちらの親切を無にする可愛くない奴だと思ったことでしょう。

その時点で私の兄貴は一人娘と恋におち、婿養子に行ってしまったので、私が家を継ぎ最終的には両親の世話をしなければならないとな

ると、就職先はせめて首都圏が良いだろうと思いました。あまり大企業よりも成長が見込まれる中堅企業が良いと絞っていったら、一応の結論として自動車産業を主な顧客とするベアリングの会社「日本精工」が浮かび上がりました。そうしたら大学でクラスもゼミも一緒だった中村君が「伯父が会長をしているので会社訪問に付き合っただけでやる」と親切に言ってくれました。私は渡りに船と早速会社訪問に二人で出掛けました。中村君のお陰で中野という人の良さそうな人事部長が会ってくれて、一橋と東大は毎年各々一名採用することになっていると教えてくれました。これはちょっと厳しいと思いましたが、中野部長の人柄に魅力を感じたので第一志望として入社試験に臨むことにしました。

試験当日会場に行ってみると、一橋から五～六人試験を受けに来ていた中に何と私を日本精工に紹介してくれた中村君もいるではないですか。私は驚いて「どうしたのだ」と聞くと「受かると思った「横浜ゴム」に落ちてしまったので、もう友情も何も関係ない。伯父に頼んでこの会社に入れてもらうしかない」と言うではありませんか。私は中村君が入れば私は落ちるに決まっているので、一気にやる気を無くし、怒りでカッカする頭を冷やすため、上着を脱いだ上にワイシャツを腕まくりして筆記試験に臨みました。

筆記試験の結果は私が全体で一番だったけれど、「田中君には縁故がないということで」中村君を推す声もあり、やむなく中野部長が一部始終を話してくれて、「中村君を採用したのでは筋が通らない」と役員会で頑張ってくれたお陰で私が採用されたことが、入社後中野部長と親しくなってから分りました。

## 6. 社会人時代

### その一 二十六歳まで

日本精工に入社して半年間は、新入社員全員一緒の研修でした。取引銀行から派遣されてきていた常務の訓示や、各工場先輩達の講義があり、最後に感想文を書かされました。私は、常務がやたらに愛社精神、愛社精神と強調するのは適切ではない。愛社精神は長年その会社において働き甲斐を感じ、この会社の為なら頑張れるという段階で自然に愛社精神がもてるようになるのではないかと、また縁故採用を中心としてきた当社は活力に欠けているのではないかと、眠れる獅子のまましていると、やがてライバル企業にやられてしまうのではないかと、という内容の感想文を出しました。これには人事部で大分物議をかもしたらしく、中野部長にこっそり呼ばれ、「君の言いたいことは分かったが、この会社でうまくや

っていくには、暫く「眠れる猫」でいてくれたまえ」と諭されました。同期新入社員の中には後に文部大臣になった保利耕介氏も含まれていました。

最初の配属は本社の経理部でした。そこは出世コースであるらしく、東大、一橋出身者で占められていました。先輩達は飼い慣らされたペットのように黙々と単純な事務を飽きることもなく毎日続けていました。私は一番下っ端でしたので、お茶汲みなどの雑用が仕事の中心でした。あまり退屈なので、混声合唱のクラブに入り、その事務局を引き受けました。

合唱団のリーダーは早稲田のグリー・クラブの部長だった人で、藤沢工場の人事係長をしており人柄も立派な人でした。毎週一回クラブ員全員が藤沢工場に集まって練習しました。指揮者は下手な合唱団から良い音を引き出す名人といわれた人でした。

その年の終わり頃、神宮外苑にあった日本青年会館で「産業人合唱コンクール」が催され、幸運にも日本精工が一位優勝してしまいました。表彰式でカップを授与される段階になり、部長が入部一年目の私に向けて「お前貰って来い」といきなり命令されて尻込みしていると、「早く行け」と急かされ、おずおずとカップを受け取りに行きましたが、家に帰

るとおふくろに、「NHKのニュースにお前が出て来たので驚いたよ」と言われ、NHKが取材をしていたことを知りました。

次の年になり、また新入社員の採用があった筈なのですが、経理部の私の下には誰も来ませんでした。ある日公認会計士の監査ということで三人位の人が経理部を訪れました。部長以下幹部が揃って丁寧に迎え、会議室で書類や伝票を要求されるままに出して調べてもらっていました。私はその時公認会計士というものを初めて見ました。どうせ経理の道を行くのなら、不正を調べられる側よりは調べる側になりたいとその時思いました。

それから数カ月たったある日、出社のために電車に乗ろうとしましたが、満員でなかなか車内に入れません。私は前の人の背中を思いっきり押しました。混んでいる時は押したり押されたりするのはお互い様だと思っていたのですが、押した相手が悪かったのです。いかにもやくざっぽい男で、私に罵声<sup>ばせい</sup>を浴びせ、唾<sup>つば</sup>を吐きかけました。私は喧嘩をしても勝ち目はなかったのでじっと耐え抜いて出社しました。

ムシャクシャしている時に係長から「田中君、これをやってくれ」と言って超簡単な作業を命じられました。普段なら「はい」と言って受けるものを、その日は素直になれずつい「こんなことは中卒でも出来ます。

私はこんなことをしにこの会社に入った訳ではありません」と口答えしてしまいました。係長は怒って「中卒の仕事をして大卒の給料を取っていて何が不満なのか」と一見理にかなっているようで私の不満には全く<sup>こた</sup>応えていない叱り方に、私は切れてしまい、皇居前にあった旧郵船ビルの四階の窓に係長を押し込んで、今にも道路に突き落とそうとしました。私はそこまでする気はなかったのですが、課長達から見れば、私が本気であるように見えたのでしょう。直ちに私に辞めてもらうという結論に至ったようです。

私も辞める積りでいましたが、自己都合で辞めるのと不祥事を起こして免職になるのでは、次の職場での受けは全く違います。そこは中野人事部長がうまく処理してくれて、自己都合による退職としてくれました。しかし中野部長自身は、とんでもない人間を採用した罰として子会社に左遷されてしまいました。

私はここまで落ちたら何か資格を取らなければ再就職も出来ないと真剣に悩み、公認会計士になろうと決意しました。当時お茶の水駅の近くに中央大学があり、そこで公認会計士の試験の予備校みたいなことをやっていたので、そこに入って二次試験のための勉強をすることにしました。いわば社会人になってからの浪人生活です。

実を言うと、その時期に私には人生上の重大な出来事が控えていたのです。学生時代にダンスで知り合った女性との関係を引きずっていました。日本精工に勤めている時、下宿での一人暮らしの<sup>わび</sup>侘しさに耐えかねて、つい彼女を下宿に呼んでしまったのです。彼女は本当の妻のように一生懸命いろいろな家事をやってくれていました。泊っていくことはありませんでしたが、大人の男女のことですから何もなかったとは証明できません。彼女のお母さんからは「田中さん、そこまで行っているのなら責任を取っていただきます」と釘を刺されてしまいました。結婚は早い方が良いということで浪人中の結婚という私にとっては極めて外聞の悪い<sup>みじ</sup>惨めな結婚式と相成ったわけです。

公認会計士の二次試験は幸運にも半年位の浪人生活でパスし、会計士補として公認会計士の補助作業は手伝えるようになりました。そこで家から通える範囲にある公認会計士の事務所を探したら、京成電鉄の谷津遊園駅の近くにある「元吉重成公認会計士事務所」が良さそうだと分かりました。元吉先生は大学の先輩だし、元千葉県の県会議員もやられていた立派な先生で、監査会社を八社ももっていて税務は一切やらないで食べていける事務所でした。

ある日、私一人で今はない<sup>やおう</sup>八欧電器という会社に監査に行かされたこ

とがありました。元吉先生と一緒に時は丁重に迎えてくれていた経理課長が「今日は忙しいので、昼間は映画でも見て来て下さい。夜は一席設けますから」と軽くあしらわれてしまいました。やむを得ずその指示に従いましたが、なめられたという屈辱感で一杯でした。監査という仕事は、会社の業績を一般に公表する「有価証券報告書」の記載に誤りがないということを証明することです。会社側からすれば公認会計士は招かざる客で、しかも日常の業務に少なからず支障を来します。私はこの道を選んだことは失敗だったかなと思いました。

またある日、日本航空整備という会社に元吉先生に私を含めて何人かの会計士補が従って監査に行きました。例によって夜には会社側からの接待が始まったのですが、私がつるつるの里芋を口に運ぼうとした時、うっかり落としてしまい、その里芋がテーブルの反対側に座っていた経理担当常務の前にドンダリのようにコロコロ転がって行ってしまいました。私はしまったと思ったのですが、その場では皆大笑いをして無事宴会は終了しました。しかし事務所に戻ってからが大変でした。

まず箸の持ち方から直されて、次は生の大豆を一つの皿から別の皿に移す練習をさせられました。それが出来るようになると、より小さい小豆で同様のことをやらされました。お陰で私は箸の正しい持ち方を習得

することができました。その後の人生で誰かと飲食する時、その人の箸の持ち方がつい気になってしまいます。大人の人でもかなりの人が、かつての私のように箸を交叉<sup>こうさ</sup>させて使っていることが分かりました。

先生の事務所といっても畳の部屋をそのまま使うもので、私のような会計士補が何人かいました。事務所員の楽しみは、奥さんが出してくれる昼食でした。多くは飲食店から取り寄せるカツ丼や天丼などで、奥さんの手料理もたまにありました。カップラーメンが発売され出した頃の事ですが、小さなカップにインスタントラーメンが入っており、それを一個ずつ各人に与えられました。メーカーではそれを一人前として販売したのですが、食べ盛りの若者にはとても足りません。「これはないよな」とぶつぶつ言いながらも奥さんには気づかれないように、その午後は皆お腹をグーグー鳴らしながら仕事をしたものです。

その時の仲間に、一つ年上の東大出の稲葉さんという人がいて新米の私の良い相談役になってくれました。彼は大蔵省に入りたくて公務員試験を受け合格したのですが、学生運動で警官と闘っている写真が国側に残っていたために採用されなかったという不運な経歴の持ち主でした。ある日彼から「大学時代の教授が沢山並べられた書物の後ろにエッチな写真のネガを隠しているのを知っている。それを何とかコッソリと持ち

出して来るから、田中君引き延ばしてくれないか」と頼まれました。私もそれには興味を引かれたので、我が家で引き延ばしてみようと引き受けました。彼がそのネガを入手してから、家に来て貰い、雨戸を全部閉めて真っ暗にし、引き延ばし機を使って引き延ばしてみました。教授が外遊している間に外国で入手したものらしく、外人の男女が絡み合ったかなりきわどい写真ばかりでした。夏だったので密閉した部屋の中の温度は高く、二人共パンツ一丁で作業をしたのですが、現像液の中に浮かび上がってくる映像に興奮し、パンツがテントのように盛り上がってくるのを抑えることができませんでした。ここまでは何とかやれたのですが、写真には水洗いという工程が必要で、我が家では大きな洗濯たらいに水をいっぱい満たしてそこに一晩つけておくという方法しかとれません。両親特に母親に見つかっては困ると強く思っていたことまでは覚えていますが、どのように切り抜けたかは忘れてしまいました。とにかく数十枚の発禁物の写真集が出来上がり、稲葉さんが「これを見ると目がつぶれるぞ」と書いた封筒に大切にに入れて大喜びで帰って行きました。

数日後、稲葉さんが耳寄りな話を持ってきてくれました。「日本能率協会という日本で一番レベルが高いといわれているコンサルタントの会社が、公認会計士と会計士補に限って募集している。自分は元吉先生の所

で公認会計士になって暖簾<sup>のれん</sup>分けをしてもらう積りだけれど、田中君は監査業務には向いていない。既に終わってしまった事業の会計資料をいじり回すよりも、これからどうすべきかを提案する方がずっと面白いと思うよ」と私に転職を勧めてくれました。私はこれは良い話だと思い能率協会を受験し、合格してから元吉先生にコンサルタントになりたい旨申し出ました。一年足らずで辞めてしまう私のことを一切責めることなく、「新しい分野で頑張りたまえ」と言って送別会まで開いてくれました。

## その二 能率協会時代

日本能率協会という所は、戦争中に軍需産業の生産性向上のために岸信介（当時商工大臣、後に総理大臣、現在の安倍総理の祖父）によって設立されました。戦後も平和産業の経営合理化を推進する目的で存続させられた通産省所管の公益法人です。私が入った頃は、コンサルティング事業、出版事業、教育事業など経営に関するいろいろな事業を総合的に行っていました。

私は最初コンサルティング事業に配属になり、初めての仕事は三菱造船の長期経営計画を策定するという仕事でした。三菱造船所の生産性向上という戦前から引き続く仕事の最終段階として、長期経営計画という

本社の最重要課題のお手伝いが総仕上げとして残っていたのです。能率協会としても常務理事をリーダーに理事三人、その下に私より六歳年上で東大出の田代さんという公認会計士、そして私という強力な班編成で臨みました。

丁度池田内閣の所得倍増計画が発表された頃で、日本中がやや浮かれ気味で、調査班内部でも行け行けドンドンというムードが漂っていました。そんな中で「ちょっと見通しが甘すぎるのではないか」と不安を感じ出したのが、今回の募集で入社したばかりの田代さんと私でした。そして秘かにリーダー達が作成している報告書とは別に少数意見としての田代・田中案を書いて、三菱造船の窓口担当者に先輩達の案より自分達の案の方が優れていると触れ回りました。

私がこのような行動に出た裏には次のような背景がありました。理事の一人である今坂理事が三菱造船のコンサルティングの間に「ラッカープラン」という経営者側と労働者側の配分についての著書を出したのですが、その中に私が能率協会の研究論文を自由に発表できる小冊子に書いた「データの読み方」という論文を全文そのまま載せていたことです。私には全く事前の断りはありませんでした。今坂理事は能率協会に入る前はキリスト教の牧師をされていたというから、社会的に見れば人格者

の類に入る人です。私は能率協会に入って僅か半年で反乱を起こすのは早すぎるとは思いましたが、仕返しをしなければ済まない気持ちになっていました。その時期に田代さんからの誘いがあり、前記の行動に出た訳です。

三菱造船への正式の報告会は無事済んだのですが、その後で、三上、三宅両理事から田代さんと私が呼ばれ、「御馳走するからついてくるように」と言われました。私達は慰労会に呼ばれたものと浮き浮きした気分で行くと、寅さんの帝釈天の近くの川魚料理屋の「川甚」に連れて行かれました。私達はまず風呂に入り、「川甚」のおかみも同席した上で宴会になり、田代さんと私は調子に乗って田代さんは三高の「琵琶湖周航の歌」を、私は覚えたばかりの「さんさしぐれ」などを歌い、いい気に酔っぱらってしまいました。楽しい宴会も終わろうとしている時、三上理事から、「お前等はやり過ぎた。こんな反乱は能率協会始まって以来だ。そうゆうことは、自分が班長になってからやるべきだった。明日からは能率協会には入社する必要はない」と免職を言い渡されました。

田代さんは既に正式に公認会計士の資格を持っていたので素直に辞めていきましたが、私はまだ会計士補に過ぎないので「はい、分りました」という訳にはいきません。

三菱造船の仕事が終わって間もなく、能率協会に「総合研究所」という役所を主なクライアントとする事業が設けられることになり、その所長に出版事業部の長だった早川常務が就任することになりました。「捨てる神もあれば拾う神もある」とは良く言ったもので、早川常務は「田中という男は面白そうだ」と総合研究所のリサーチャーとして私を使ってくれることになりました。

### その三 総合研究所（日能総研）時代

日能総研時代は創業期でもあり、五人のメンバーでのスタートとなりました。所長の早川常務、仙場さん（ヤマハでエレクトーンの開発者の一人で後にガンで早世する）、広野さん（成蹊大学の助教授で後に国連の事務局長になる）、松井さん（企業の研究開発管理の専門家で、後に立教大学の教授となる）と私でした。人数は少ないけれど、その分だけは稼がなければならないのは当然です。コンサルティング事業部に来た仕事で、「これはやばい」といって誰も引き受けなかった性悪<sup>しょうわる</sup>調査などもどんどん総研で引き受けました。カトリック教会の牧師の息子が、自分で事業を始めて大赤字を出し教会の財政が危なくなってきたとか、北野建設が東京に進出するための戦略を立てるとか、NHKの料金徴収業務を

合理化するとかいった雑多な仕事を捌きこなす必要がありました。また森川会長のルートで舞い込んで来る仕事もありました。そういう仕事は比較的中小企業で、工程管理、事務管理、作業管理、長期計画の作製等を全て含む依頼内容だったので、それぞれ専門分野に分かれて指導に当たっているコンサルタントには不向きで採算も悪かったので引き受け手がいなかったのです。

私は最早逃げ込む場所がなかったので、早川常務の指導のもと、ダボハゼのようにどんな仕事にも喰らいつき、新しい分野の仕事には先輩達書いている研究報告書を参考にしたり、自分で中小企業の幹部にも分かりやすい方法を考え出したりして何とか乗り切りました。どんな事業でも創業期が一番刺激があって、変化にも富んでいて面白いのだということが分かりました。

そのようにして数年が過ぎ、総研の人数も二十人位になった頃、防衛庁から、中国を仮想敵国として、人や物の流動の面からどこを重点的に防衛したら良いかという大変難しいテーマが日能総研に飛び込んできました。総研には大型コンピューターはないし、それを操作できる人もいないので、早稲田大学の生産研究所と共同調査をすることになり、早稲田大学側から高たか際ざわさんという私より五つくらい上の大学院での研究員が

送り込まれて来ました。私もメンバーの一人に入れられて、ある時高際さんと二人で九州に資料集めに行くことになりました。防衛庁の仕事とあって自衛隊の輸送機で行くことになりました。福岡の板付飛行場に着いたのですが、季節外れの大雪で民間の飛行機はどんどん着陸しているのに、第二次大戦中の米軍のオンボロ輸送機では着陸できません。機長からメモが回ってきて、やむを得ず大分空港に着陸するという事です。大分に行くと雪はもっとひどく、「宮崎のニュータバル空港まで行くけれど途中で燃料がなくなるかも知れないので全員浮袋を装着しておくように。海中に浮いていれば、二十分位で救助船が来る」という機長のメモが回ってきました。

これはえらいことになったと思いましたが、同乗していた自衛隊員の人はしゆくぜん肅然と座っているので、私も真似をして静かにしていました。幸いその輸送機はニュータバル空港まで燃料が持ち、無事着陸することができました。その晩は自衛隊員用のベッドに寝ましたが、固い二段ベッドに綿の毛布一枚しか与えられずガタガタ震えてよく眠れませんでした。その上、ニュータバル空港を飛び立ったジェット戦闘機が海中に墜落し、操縦士が一人死亡してその葬儀がその晩行われたと放送がありました。

私達は一週間位陸運局などをめぐって資料を集め東京の事務所に戻っ

てみると、日能総研で防衛庁の仕事をしていると聞きつけた全学連の過激派がゲバ棒を持って会長室に押し入り、内部をメチャクチャに荒していったことを知り、自分達がやっている仕事の重さを実感したことでした。

早川常務と私で「第一製パン」という中堅企業のコンサルティングに行っている時です。仕事が終わってから早川さんが「良いところへ連れて行くから黙ってついて来なさい」というのでそれに従って行くと、池袋の手前にある護国寺という大きなお寺に連れて行かれました。そこで私は中村天風という生涯の師に巡り会うことになります。天風先生は当時八十数歳で、お弟子さんには、日本海海戦で有名な東郷元帥<sup>とうごうげんすい</sup>、昭和天皇、松下幸之助などそうそうたるメンバーが含まれる人生の大哲人です。一応財政上の理由で宗教法人ということにはなっていますが、実際は宗教とは関係なく、ご自身の実体験を体系的に纏<sup>まと</sup>め上げた人生哲学を世界に広めようとなさっている凄い啓蒙家<sup>けいもうか</sup>です。三百円の受講料さえ払えば誰でも参加できる開かれた団体でした。護国寺の畳の大講堂には老若男女がぎっしり詰まって座っていて、まるで講談のような血沸き肉踊るお話<sup>しり</sup>に聞き入っており、私も足が痺<sup>しび</sup>れるのを忘れて恍惚<sup>こうこつ</sup>となってしまいました。

天風先生は終戦当時皇居にいて、天皇の終戦の宣言である玉音放送の原稿を書かれ、それを放送させまいとする近衛兵から最後まで守り通し、無事放送にこぎつけました。

天風先生は東京と大阪でそれぞれ年一回二週間位の実習訓練を行っていました。私は妹の旦那が日本生命の大阪支店に勤めていて、お袋と家内と息子を連れて行き、妹の家から大阪の実習に通いました。実習の内容は座禅・瞑想やテレパシー、こよりで割り箸を切ること、畳針を腕に突き刺すことなどで、人間には誰にもこのような能力が潜在的に存在しているのだということを教えることが目的だったようです。テレパシーの訓練は、目隠しをした受信者に発信者が声を発することなくある行動をとるように命じて、その通りにできるかどうかを競うもので、私が見たところ子供達の方がうまくできているようでした。

そんな実習の最中<sup>さなか</sup>に私に電話が入り、お袋が交通事故で大怪我をし、<sup>すいた</sup>吹田の病院に運び込まれたというではありませんか。詳しく聞くと、妹の家の車を免許取りたての家内がいたずらしてアクセルとブレーキを踏み間違っ<sup>て</sup>急発進させてしまい、車の前で遊んでいた一歳半の息子を轢いてしまいそうになったので、お袋が息子を拾い上げて自分が車と壁の間に挟まってしまったという事です。幸い息子は軽傷ですんだのですが、

お袋は重傷で救急車で病院に運ばれたという事です。

病院に駆けつけると、病院のベッドは一杯で、廊下に仮設ベッドを置いて転がされていました。看護婦が来て輸血をしてくれましたが、針がうまく血管に入らなかったのか、首がみるみる太くなり、「義明、これは地獄だよ」と私が初めて聞くお袋の弱音でした。そして間もなく息を引き取りました。天風先生は一晩中私に念力を送ってくれており、私はそれを受けてお袋に念力を送るという<sup>てはず</sup>手筈を決めて実行したのですが、力及びませんでした。

早川常務は私に天風先生を紹介した後、間もなく心臓の病気で亡くなりました。

その後を継いで所長になった高木さんは、大した実績も残せず短期で退任しましたが、大塚史学として有名な大塚久雄東大教授の下で、中世のヨーロッパにおける中小企業の研究を続けてきて、総研の所長をしている間に大塚先生から博士号を授与されました。私は招かれて上野の精養軒で催された祝賀会に出席し、私も何時か博士号を取得したいと思いました。

私はコンサルタントとかリサーチャーという仕事は大変面白いのですが、何時先輩達と衝突して辞めざるを得なくなるか分からないし、能率

協会の退職金はネズミのしょんべん程度だったので、家族のための安全弁として公認会計士の第三次試験を通過して営業登録さえすれば何時でも開業できるようにしておこうと思いました。その当時不動産鑑定士という国家資格も生まれたので、難しい二次試験までは通っておこうとも思っていて、電車通勤の車内で勉強を始めました。いずれも一回でパスしたのですが、公認会計士の試験官のレベルの低さに呆れてしまいました。制度切り替えの時に、戦中から計理士をしていた人達に大幅な下駄を履かせて合格させたせいだと思います。私はその<sup>いきどお</sup>憤りを込めて生まれて初めて個人名の本を書きました。

本の名は「新企業分析入門」というものですが、私の本心としては入門という文字はつけたくありませんでした。その本を以前お世話になった元吉先生と稲葉さんに贈ると、これは入門ではなく<sup>おうぎ</sup>奥義だと言われました。能率協会の畠山専務理事も高く評価してくれて、コンサルティング事業部の人達を大きな部屋に集めて、私に説明する機会を与えてくれました。この本は日経新聞でも取り上げて記事にしてくれました。

高木所長の次の所長は、総研所員の多くが推す三宅理事でした。三宅さんは海軍技術中佐で戦争中軍艦の製造の指導をしていた人です。三菱造船の仕事の時、三上理事と一緒に田代さんと私をコンサルティング事

業部から追い出した人ですが、実際は温厚で平等な良い人なのです。三宅さんは所長に就任早々、ミューチャル・レイティングというリサーチャーの相互評価制度を取り入れ、結果を公表しました。それによると総研五十人のうち一番貢献しているのは田中だという評価になりました。総研所員は担当する主なテーマによって四つに分けられ、私もその一つを率いていましたが、三宅さんは総研の次長つまり所長の次の地位を私に与えました。その当時三菱総研、野村総研など財閥系のシンク・タンクが続々と旗揚げしており、三菱総研が音頭を取ってスイスのジュネーブにあるバトル研究所に勉強に行こうという話が出て、日能総研からも一人出すことになりました。それに「お前が行け」と三宅さんが命じました。

私にとっては初めての海外研修なので大変有難いことなのですが、他のグループ長、とりわけ年上のグループ長は面白くありません。昼休みの昼食時などにさんざん嫌味を言われ、「組織で出世などしなくていい、海外旅行から帰ったら次長ばかりでなく職員も辞めてやろう」と決心しました。

そんな気持ちでバトル研究所に行ったのですが、気持ちがすさんでいるので真面目に勉強する気などありません。二十人位のメンバーでし

たので一人くらい抜けても何てことはない、日程の半分位の二週間は一人でヨーロッパ旅行を楽しみました。主催の三菱総研には「社用でどうしても行かなければならない」と嘘をついて許可を得たのでした。幹事の人以外のメンバーに感染することを恐れていたので、「一週間位は講義に出て欲しい」と言われました。研修は先方のシニア・リサーチャーの手隙<sup>てすき</sup>の者が交替で自分が担当するテーマとそれへのアプローチ方法、仮説的結論などを話すもので、私が日常やっていることと変わりませんでした。一つ私の注意を引いたのは、資料室が充実していて、与えられたテーマについて、八割方報告書が出来る位の資料を資料室で揃えてくれるということでした。そのために資料室長にはベテランのリサーチャーが当たっていました。日能総研では、女性スタッフが一人で、検索用のカードを作っているだけでしたので、これで帰朝報告は出来る<sup>と</sup>安心して一人旅に出ました。

最初に降り立ったのがギリシャのアテネでしたが、そこでまず大きな詐欺に遭ってしまいました。私のホテルの前の小さな公園でたむろしていたのが、りゅうとした背広姿の見事な紳士でした。彼は横浜に彼女がいて、日本に行ったことがある、今開催されている大阪万博について聞かせてくれないかと声を掛けて来ました。ガス会社に勤めているという

名刺を出して私を安心させ、公園の露店で売っているビールとつまみを  
買ってきて私にすすめました。

そして翌日はパルテノン宮殿などを案内してくれた後、今夜は割り勘で  
飲みに行こうと約束して別れました。

その辺でこれは怪しいと気付かなかった私が悪いのですが、彼が連れ  
て行ってくれたクラブは、裸に近い女性の沢山いる見るからにいかがわ  
しい日本でいうキャバレーのような所でした。私は両脇に女性を座らせ  
ビールばかり飲んでいたので、周りを見ると、女の子達が皆シャン  
ペンのグラスを持って私に向って「ごちそうになります」と言っている  
ように見えます。そのうちにヴァイオリンを持った男性が席に近づいて  
きて、「上を向いて歩こう」を弾いてくれたので、私がチップで千円ほ  
ど払うと、隣の女の子が「もっと払って」と言うので二千元払いました。  
ふと見ると昼間の男の姿が見えません。私はトイレに行ったのかと思っ  
て見に行きましたが、居ません。レジ・カウンターで聞くと、彼は自分  
の分として十万円払って先に帰ったというではありませんか。私はやら  
れたと思いましたが後の祭りです。

私はビールしか飲んでいないのに、十万円は不当に高いと言って文句  
を言いましたが、回りに船乗り風の屈強な男が四～五人私を取り囲んで

「エーゲ海に死体となって浮かびたくなければ、大人しく払え」と脅迫しました。こうなっては払わざるを得ないと思いトラベラーズ・チェックで渋々払いました。

初日から大出費してしまったので、それからは超節約旅行です。飛行機は昼食の出る便に変え、宿は駅で並んで労働者や学生が泊まる安宿から選びました。ドイツのハンブルグでのことです。イギリスからドイツに留学に来ている大学院生と同室に泊まったので、かなり割安になりましたが、昼間がいけません。彼はサッカーの試合を見に行くと言ってしまいましたので、私は一人でストリップ劇場に行きました。日本のように入場券さえ払えばよいとばかり思っていたのですが、ドイツは違いました。入場は無料なのですが、中に入ると踊り子の一人が隣に座って「何か飲みませんか」と言うのでビールを注文すると何とシャンペンの栓を抜いて持って来てしまいました。私はカウンターに行って文句を言ったのですが、用心棒のような男が「お前と踊り子のやりとりは関係ない。店としては出したものの料金は払ってもらわなければならない」と言って、私の宿まで車で来て強引に代金を取られてしまいました。

いよいよお金に困った私は、デンマークのコペンハーゲンに向かう飛行機の中で日本人を探しました。かなりすいている飛行機の中で、一人

日本人とおぼしき人がポツンと座っていました。隣に座って話してみると、アマチュアのゴルファーでスペインのマドリッドで世界大会に出場した帰りだということです。大阪で大きなキャバレーを経営しているといえますから大金持ちに違いありません。

私は事情を話し、何とか四万円ほど貸してほしいとお願いすると、信用してくれたのかすぐにオーケーしてくれました。彼は大会の後、旅行社が組んでくれた計画通り各都市を回って来たけれど、全く英語が話せないで、空港に近いホテルに泊まってどこも観光せずに次の空港に行くだけの旅を続けているということでした。

私はそれは勿体ないと思い、コペンハーゲンでは同じホテルを取って一緒に外出すれば多少の通訳は出来ると伝えたと、大変喜んでくれました。彼の希望は白人の女性とセックスしてみたいということと、日本では買えないエロ写真の本を買いたいということでした。その願望は私も同じでしたので、すぐ意気投合し、ホテルにチェック・インした後二人で街に繰り出しました。デンマークはフリー・セックスの国というだけあって広場には可愛い女の子が沢山客待ちをしていました。またポルノ写真を売っている本屋もすぐ見つかりました。それぞれ二十冊位ずつポルノ写真集を買って求めたから、彼に好みの女性を選ばせ価格等の交渉を

してあげました。私はまだあとの旅程が残っており、お金がまた足りなくなってしまうのは困るので遠慮しておきました。

その後、イタリアのローマ、ベニス、フランスのパリ、イギリスのロンドンと回ってオーストリアのウィーンに行きました。ウィーン的美術館を観ている時、「日本人の方ですね」と声を掛けてきた品の良い老人がいました。神戸大の教授ということなので名刺を出して自己紹介すると、その教授はびっくりしたような顔をして私の顔をジロジロ見えています。「私はあなたと全く同じ名の著者の本を大学院の学生の輪読会に使っています」と言われるので今度は私の方が驚いてしまいました。私のような人間の書いた本が大学院の学生のテキストに使われるとは夢にも思っていませんでした。いい加減な気持ちで本は書けないかと再認識させられました。

いよいよ一人旅は最終段階に入り、財布を見るとオランダのアムステルダムに行く位のお金は残っていました。「飾り窓の女」という映画があり、アムステルダムには日本の吉原のような公娼が集まっている街があることは知っていました。ガイド・ブックにもおよその料金が書いてあったのでお金の心配をせずに行けるなと思いました。行ってみると、大きなガラスの展示スペースに白人、黒人、サド・マゾ用の女とよりど

りみどりの女達がそれぞれセックス・アピールをしながら展示されていました。

私は外人の女性とは初めての経験なので恐る恐る白人の女性を選んで入って行くと飾り窓のすぐ裏が小さな部屋になっており、シングル・ベッドが置いてありました。私は一番安いコースを選ぶと、その女は手で私の男性自身が今にも破裂しそうになるまで刺激を与えながら自分自身の中に挿入しました。あっという間に彼女の仕事は終わり、私が服を着て外に出る頃には彼女は既に飾り窓でポーズをとっていました。その間僅かに二十分位で何とも味気ない思いでした。

私は欲求不満のまま歩いていると、展示商品の中に可愛い引き締まった体の黒人女性がいましたので入ってショート・コースを申し込みました。小柄な女性でしたので、サイズの的にも合っていたし、前の白人のように手で揉むなんてこともなかったので、時間は短かったけれどまああの満足でした。ただ私の感じでは、日本人には日本人が合うという結論でした。

ジュネーブに帰って、研修の仲間達にポルノ写真集を多少の利幅をつけて三分の二位売りつけました。私は最後の一週間位真面目に研修に出て、マッター・ホルンへの旅行にも参加しました。そこでまた皆に迷惑

をかけることをやらかしてしまいました。

マッター・ホルンには見晴らし台までロープ・ウェイで登れるのですが、皆で登った時は濃い霧で何も見えませんでした。皆は諦めて帰って行ったのですが、もう一人の若いメンバーと私は、「もう少し待ってみようか」と待っていると、霧がさっと晴れてヨーロッパ・アルプスの山並みがよく見えるようになりました。二人が夢中で写真を撮ったりしていると、ロープ・ウェイの最終便に乗り遅れてしまいました。見下ろすとツェルマットの街が夕日に輝いて良く見えたので、二人で歩いて下山し始めました。山の日暮は思ったより早いとよく言われているようですが、登山の素人二人にはそんなこと分りません。みるみる周辺は暗くなり、巾四メートル位の登山道がツェルマットの方向に延びているのがやっと確認出来る程度になりました。道の両側には小屋がいくつかあるのですが、それは羊の小屋で人は居らず、明かりもついていません。

そのうち真っ暗闇になり、二人は街の灯りだけを頼りに、手をつないですり足でゆっくり下りて行きました。見晴らし台からあんなに近くに見えたツェルマットの街が、歩いてみるとこんなにも遠いのだと実感させられました。

地元では、これは遭難の可能性もあると救助隊を編成し出発が間近に

迫っていました。そこへ私達二人がひょっこり現れたのです。三菱総研の佐藤さんからはたっぷり絞られました。そんなこともあって私は三菱総研からは嫌われたと思っていたら、研修団の佐藤さんから電話があり、三菱総研の顧問となって、若いリサーチャーを指導して欲しいと依頼がありました。私は途中で抜き出したりしましたが、「バトルのリサーチャーと対等に渡り合えたのは田中さんだけだった」と言われました。私は指導者になるよりも、自分も泥んこになって仕事をするのが好きだったので断りました。

能率協会に帰ってからの理事達への報告には、途中の一人旅の話はせず、資料室を充実すべきことと、リサーチャーから大学の先生になったり、逆に大学の先生からリサーチャーになったりという交流を活発にすべきだという提言をすることで済ませました。

研修後は、「なんで田中が行ったんだ。若手に譲るべきではなかったか」という批判が起こりました。私は行く前に決意したように辞表を提出し、能率協会から籍を抜きました。すぐ全面的に引くことになるクライアントに迷惑がかかるというので、大きなプロジェクトが終了するまでは、囑託としてお手伝いすることになりました。

当時私が担当していた大きなプロジェクトは、「沼田ダム」と「ハッ

場ダム」の建設に当たって補償の一環として行われる「関連地域開発」の計画策定でした。「沼田ダム」は「東京の水は利根川から」の掛け声と共に企画された日本最大のダムで、四千戸も水没するという極めて実現が難しいダムです。私は外部に有力な助っ人が必要と、東大農業土木の新沢教授を訪ねると、「自分は年齢的に現地に行って調査することはできないけれど、自分の研究室の若手グループは多いに使って欲しい」とのことでした。紹介していただいた岡本助教授、華山講師、布施助手の三先生には、次に述べる「水問題研究所」でも大変お世話になりました。「沼田ダム」には、当時としては破格の年三千万円という予算がついたので、建設省OBで文化勲章を授賞している日大教授の鈴木先生を委員長に関係分野の専門家十数人の委員会を設置してワーキング・グループの調査、立案の成果を審議していただきました。政界では福田、中曽根両氏が沼田ダムの賛成・反対を巡って争い、群馬県議会も賛否を決め切れずに揺れている時、当時の田中総理が国会で「沼田ダムの建設は断念する」と発言し、私達の三年にわたる努力は無駄になってしまいました。

一方の「ハッ場ダム」は、同じ利根川水系に計画されたダムですが、川原<sup>かわら</sup>湯温泉が水没するとあって、絶対反対派と条件付き賛成派に分かれて争

っていました。計画から七十年すったもんだした<sup>あげく</sup>、今年（二千二十年）の四月にやっと運用に<sup>こ</sup>漕ぎ着けました。勿論私はそこまでお付き合いは出来ませんでした。

#### その四 水問題研究所時代

私は私がリーダーをしてきたプロジェクト・メンバーのうち、これだと思うメンバーを引き連れて(株)水問題研究所というシンク・タンクを立ち上げました。その中に私が次長になった時に猛反発をした六歳年上の奈良さんも含まれていました。私の方から誘った訳ではないのですが、奈良さんも日能総研には面白くないものを感じていたのかも知れません。奈良さんは京大出で、大学院は東大でドクター・コースまで終了している社会学者でした。国連大学や放送大学で客員講師をやっていた知識人ですが、いろいろなプロジェクトを担当した時の論理性に若干難のある人でした。ドイツ語がベラベラなので、ボン大学で講演したこともあり、経歴と知識の豊かさでは人後に落ちない人なので、営業を主に担当してもらいました。

社員ではないのですが無給で毎日のように会社の事務所に顔を出し、

所員の書くレポートなどを手直ししてくれる人がいました。私の総研時代の最後の所長だった三宅さんです。私が何人かのリサーチャーを引き連れて独立した責任を取らされて能率協会を<sup>ひめん</sup>罷免させられたのです。私の行動によって責任を取らされたのは、日本精工の中野部長に次いで二人目です。三宅さんは東京電機大の客員教授になっていましたが、おそらく結構暇があったのでしょう、私が会社の経営上のことで相談すると、真剣に考えてくれました。水問題研究所という社名も三宅さんが考えてくれました。私の利水・治水・水環境といった分野での調査実績が、建設省、国土庁、環境庁といった水に関係する省庁にかなり知れ渡っていると三宅さんは読んだからでしょう。

神田の神保町に六十坪ほどの事務所を借り、五～六年は順調な経営が続きました。人員も増やさなければならず、募集の広告を新聞に出したところ、ある日変なおばさんが事務所を訪ねて来ました。私が何の用かと聞くと、「人員募集に応募してきた」と言います。どうやら「水問題研究所」を「水商売研究所」と勘違いしたようで、とんだ茶番劇でした。会社が順調だったことは、毎年バスを貸し切りにして、アルバイトも含めて社員旅行に行っていたことでも分ります。

私は建設省の本省に夜遅くまで残って、建設大臣の国会での想定問答

を書くのを手伝ったりして、次第に仲間内<sup>なかまうち</sup>だという印象を与えて行きました。高級官僚が天下りした時に、少しでも高い地位につけるようと博士論文を手伝ったりもしました。ある時は建設省ナンバー2の位置にある人が山梨県知事に立候補することになり、山梨県の夢のあるビジョンを一冊の本に書いてくれるように依頼されて書き出したのですが、途中で安倍総理のお父さんからストップがかかり、立候補取り止めになりました。

このハイライトは、当時の河川局長が参議院に出るので名刺代わりに著書が必要になるということで私にゴーストライター役が回ってきたことです。これらの活動は水問題研究所の営業につながると考え受けることにしました。かなり大変な作業になりましたが、日本能率協会から増岡康治著「水問題を考える」という本が出版されました。増岡氏の選挙事務所は、この本を全国の建設会社に送ったそうですので、数万部は捌け<sup>さば</sup>たでしょう。日本能率協会にも多少の恩返しことができました。増岡氏はその時1位当選しました。これには事後談があります。琵琶湖周辺での洪水被害に関する裁判で、国を訴える住民側がこの本を証拠として提出し、「国がこの本に書いてあるようにちゃんと対策していれば、被害はこんなに大きくならなかつたのではないか」と主張したそうです。私は建設

省の本省に呼ばれ、「お前本に何を書いたんだ」と怒られました。

私は国のやっていることに、全て賛成という訳ではありません。私は一寸法師のように小さくなって建設省本省に深く入り込み、私がそれまでに知り得た最新の方法を高級建設官僚にやんわりとお知らせするという戦略をとったまでです。

水問題研究所のスタッフ不足を一番助けてくれたのは、東大の高橋教授とその研究室がバックで支えていた「河川調査会」の事務局長だった石崎さんと、やはり東大の新沢教授の研究室にいた華山先生でした。河川調査会は利根川視察を企画したり、中国の黄河と長江の視察と先方の専門家との議論のツアーを企画したりして、私に参加を呼び掛けました。私は高橋教授やその傘下の虫明さん、宮村さん、大熊さんとも親しかったので、私自身が参加しました。

中国の河川視察は、毛沢東の死後間もなくの中国の視察で、農村は土地の国有に基づく人民公社という共同生産のシステムになっていました。貧しいながらも心のこもったおもてなしに心が和みました。しかし生活水準は日本より二十年位は遅れていると思いました。十日位の視察だったと思いますが、その間ずっと戦場写真家の岡村明彦さんと同室でしたので、大変親しくなりました。岡村さんがライフ誌に掲載した数ページ

がアメリカ人の心を動かし、ベトナム戦争の終結に向かわせたと言われます。岡村さんは帰国後も何回か水問題研究所を訪れて、若者たちを啓蒙するような刺激的な話をしてくれました。岡村さんは戦場では弾に当たらなかったのに、血液の病で倒れ若くして亡くなりました。死後NHKでは三十分の追悼番組を放映しました。河川調査会の石崎さんとは何回も一緒に出張し、大分太っていたので心配すると、「腹囲が胸囲を越えない間は大丈夫と医者に言われた」と強がっていたのに、その何日か後に自宅で脳血栓になって亡くなってしまいました。

華山さんは私より四歳年下の人でしたが、論文は一言書き出したら、一字も直さずに書き上げるという秀才でした。私は人柄も良い華山さんとは一生の付き合いをしたいと思っていましたが、ある日新聞にでかどかと東工大助教授の華山氏が、井の頭公園で焼身自殺したというニュースが載りました。私はその一週間前華山さんから一身上のことで相談したいと居酒屋に誘われていました。「田中さんは奥さんを一回替えているので、アドバイスを貰いたい」というのです。「自分は当時東工大の学長をしていた都留重人先生の奨めで東工大の助教授になり、アメリカのシュンペーター教授の研究室への留学もさせてもらったが、自分の秘書と本妻の双方の愛情に挟まれて困っている」という告白でした。そし

て「何とか秘書との関係を断ち切るから、二百万円貸してくれないか」と言うのです。私は会社のお金は貸せないけれど、その分だけ仕事を手伝ってくれないかと言いました。その後で水問題研究所に華山さんから某ダムに関連地域開発に関するレポートが届きました。彼は自殺する前に徹夜をして私との約束を果たしたのです。

華山さんが亡くなって大きな知恵袋を失った私は、彼の先輩の岡本さんと後輩の布施さんに応援を頼みました。ところが一年もたたないうち布施さんは北アルプスの朝日岳登山中、<sup>せっぴ</sup>雪庇の落下で埋まり、亡くなってしまいました。この年は私にとって大切な人が次々に亡くなっています。日本精工の時、人事部長として私を<sup>かば</sup>庇ってくれた中野さんが、パーキンソン病で亡くなりました。中野さんはロシア語の辞書の<sup>へんさん</sup>編纂にあたるなど学究肌の人で、私の高校時代の友人の就職の世話までして下さった恩人です。奥さんから連絡があり、日比谷の松本楼で<sup>しの</sup>偲ぶ会をやりたいので是非出席して欲しいといわれ、行ってみると東大時代の仲間達が十数人集まっており、ちょっと私は場違いのところに来てしまったなと思いつつも、指名されるままに、ありし日の中野さんの人情味あふれる勇気ある行動について話しました。

ここで何故水問題研究所が倒産するに至ったかについて、真相を書か

せていただきます。仕事の範囲が広がって是非優秀な土木技術者が必要になり、東大の高橋先生に紹介をお願いしました。先生は早速風間という三十歳位の若者を紹介してくれました。仕事は真面目で良くやってくれたので、信用して建設省の仕事の班長として伊勢の近くにある勢田川の洪水対策の立案を任せました。勢田川は小さな川ですが、直前に大きな災害を受けたので建設省で激甚災害げきじんに指定され、強固な堤防を築くことになり、その計画を立てるのが水問題研究所の役割でした。

ある時、勢田川を管轄する三重工事事務所の前田所長（後に国土交通大臣になる）から秘かに会いたいという連絡がありました。前田さんのことは以前からよく知っていたし、安心して事務所に行ってみると、二冊の報告書が机の上に置いてあり、一冊は水問題研究所の作成したものです。もう一冊は日本共産党からの依頼で行われた勢田川の洪水対策の調査で、流域全体で対策に当たれば、建設省がやろうとしている案のように巨額のお金は必要としないという内容のもので、報告書の最後にはうちの風間さんがリーダーとして記載されているではありませんか。

どちらの結論が正しいかはわかりませんが、どうみても同一人物が、同じテーマで同じ問題に二つの依頼者に対し全く異なる結論を提出するという事は、社会的なルールから外れていると思います。風間さんの

ことは先方で調べてあって、学生時代は東大紛争の過激な指導者で、共産党から国会議員に立候補したけれど落選したということでした。

前田さんは大変温厚な方でしたので、「この件は自分と田中さんとの間に留めて、水問題研究所の営業活動にはあまり影響の出ないようにしましょう」と言って下さいました。しかしこんな重要なことを前田さん一人で隠し通せる訳はありません。北海道から沖縄まで地域は分かれていても、建設省の内部組織には違いありません。あっという間に噂は広がって、継続の仕事で受注前から手掛けていた仕事までキャンセルになってしまいました。

水問題研究所は建設省以外にも国土庁、環境庁、自治体の仕事もしていましたが、調査の窓口となる部門の長はたいてい建設省から送り込まれてきている人でした。大まかに云えば、水問題研究所のお客さんは建設省だけとっていい状態でした。

この事件の後風間さんは本性を出し始め、私に敵対行為を取るようになりしました。会社の旅行で温泉につかっていると、風間さんが自分の巨大な一物を自慢するため、私の鼻先でぶらぶらさせて「どうだでかいだろう」と嫌がらせを言いました。亡くなった華山さんへの二百万円は会社の金を横領したのだから田中が個人の金から返せとか、内外の研修に

田中が行くのは、社員の育成を軽んじている証拠だと私に迫ってきました。さらにちっぽけな会社の中に労働組合をつくり、団体交渉と称して机をバンバン叩いて賃上げを要求するようになりました。土屋さんは私の信頼する部下でしたが、風間さんとはどうしても一緒にやれないといって辞表を持って来ました。

私は高校時代の友人がかなり有名な弁護士になっていたので、何とか風間さんだけを辞めさせられないかと相談すると、法的には可能だけれど社員が彼に支配されてしまっている間は、實際上難しい、一旦解散して再建したら良いとアドバイスしてくれました。私は一旦閉めたら再建するのは難しいのは分かっていましたが、解散するしか方法がないと思いました。そしてその年度末で残った仕事を片付けて事務所を引き払った時、銀行の借金が五千万円残りました。

## その五 一匹狼時代

水問題研究所を閉めたのは、私が五十五歳位の時でした。会社の定年は当時六十歳が一般的でしたが、私はまだ引退する気はありませんでした。コンサルタントとかりサーチャーの仕事は体力よりも知力を要する仕事です。私のこれまでの実績を知っている知人を頼って頭を下げ私の

お手伝いできそうなプロジェクトを回してもらいました。

私が最初にお世話になったのは、建設省の外郭団体である「日本ダム協会」というところでした。そこの囑託としていくつかのダムの仕事をしました。そこで私はまた大失敗をしてしまいました。そこでは「ダム日本」という雑誌を出しているのですが、その雑誌に「日本ではもうそんなに沢山ダムはいらない」という趣旨の論文を載せてしまったのです。早速建設省の本省から呼び出しが掛り、私は「飼い犬にハンマーで後ろから殴られたみたいだ。」とあって怒られました。勿論ダム協会からは首になりました。

次にお世話になったのが古巣の日能総研でした。かつての部下の一人だった広尾さんで、既に副社長になっていました。仕事は東京都の都心部にトイレとか庭の散水とかに使う中水道を引きめぐらすという大きな構想の実現可能性を検討するという難しい仕事でした。高橋先生を委員長とし、下水道局、水道局の両局長も出席する大掛かりなものでした。

都側の調査窓口になった人が、今までにない位の性<sup>たち</sup>の悪い人で、私達の調査結果にあれこれ難癖をつけます。報告書全部に「振り仮名を振れ」とか「重要な文にはアンダーラインを入れろ」と無理難題を言ってきます。私は頭に来て「この野郎、月夜の晩ばかりではないぞ、闇夜の晩に

待ち伏せして一発食らわしてやるぞ」といつも思っていました。

委員長が高橋先生だったので、風間さんを水問題研究所に紹介したことについて、一言文句を言ってやろうと思いましたが、風間さんが亡くなったという噂を風の便りに聞いていたのでやめました。

三番目にお世話になったのは、やはり日能総研の後輩の岡橋さんの所です。岡橋さんは私が辞めてから総研に入った人で、私が総研にいる時に書いた「調査の進め方」や、「中村天風先生の紹介文」を読んで、岡橋さんは本当の田中さんは、後輩達が噂している田中さんのイメージとはだいぶ違うのではないかと思って機会があったら会ってみたいと待っていたそうです。私は広尾さんの手伝いでしばしば総研を訪れていたので岡橋さんにも会う機会があり、私の評価を聞くと、「部下の書いたレポートを読みもしないで破り捨てる」とか、「部下の態度が悪いとすぐ辞表を持ってこいと言う」とか、「逃げ場をふさいでおいてこてんぱんに叱る」など悪い噂ばかりが広まっているということでした。私は当時は若かったし、そういうこともあったなと思いついた節もありました。岡橋さんは筑波大学で地球物理学を勉強してきていましたが、総研では何と福祉や介護の方を専門にコンサルティング活動をしていました。そしていずれ独立して独り立ちしたいと思っているといいます。当時は

東京都の福祉局の仕事をしており、各福祉施設のランク付けをするための評価方法を確立するという難しいプロジェクトを担当していました。

私に協力して欲しいというので、引き受けました。福祉局は、サービスの内容ごとに課が分かれており、課ごとに委員会が設置されて評価シートを別々に作るという仕組みになっていました。これから施設を利用しようという人が評価する視点は、サービスの種類によってそんなに変わるものではないので、変わる部分だけ検討することにすればもっとすっきりするのにとおもいましたが、これが縦割り行政の不効率な点だと黙って見ていることにしました。同じことをするのが大嫌いな私にはきつい委員会でした。

ある特別養護老人ホームを調査で訪問した時の事です。痴呆症の老婦人が私をつかまえて、入所のための見学に来たのではと勘違いし、「ここは女ばかりでつまらないから、早く来てよ。」と誘いました。当時私は六十五歳を越えていて、入所資格はあったのですが、もうこういう所に入らなければならない程年老いて見えるのかとショックでした。

またある時、アルコール中毒の人達だけを集めて更生させる施設を訪問した時のことです。皆さんが大変な苦勞をして節酒、禁酒をしている状況を視察した帰りに、駅の近くに生ビールの看板を眼にして、私は飲

めない岡橋さんを先に電車に乗せ、私一人で生ビール四杯位を飲んでしまったこともありました。私自身がアルコール中毒なんだと恥ずかしい気持ちでした。

ある保育園でのことです。昼食時間になって園児たちを相手に小さな机と一緒に給食を食べている時の事です。男っぽい子に私が「ぼくちゃんは大きくなったら何になりたいの」と聞きました。するとその子は後ろにひっくり返ってワーンと泣き出しました。私が男の子と間違えて声を掛けたのが気に入らなかったようです。

後で保育士さんから男女どちらか分らない時は、女の子として接した方が無難ですと注意されました。

最後にもう一つエピソードをご紹介します。帰宅の電車の中をうろちょろしている男の子がいました。その子は私を見つけると私の隣の座席でお腹を上にして横たわり、私に何か信号を出している様子です。私はギリシャを家内と一緒に旅行していた時、デルファイ神殿から宿に帰るまでよろよろとついて来る老犬に気付きました。その老犬はしばしばお腹を見せて横になり、私達に「助けてくれ」といっているようでした。私は隣に寝っころがりおなかを見せている男の子は、私に助けを求めているのだと判断し、千葉駅の近くでラーメンを御馳走すると、その子は

おかわりして二杯をたちまち食べてしまいました。

私はその男の子に「どこに住んでいるの？」といくら聞いても、決して答えようとしません。これはもしかするとドメスティック・ヴァイオレンスかも知れない、余程家に帰りたくないのだと思い、自分の勉強にもなると好奇心に駆られ、家に連れて帰りました。家内に事情を話し、泊めてやることにしました。その子は臭く垢だらけだったのでまず風呂に入れて私の隣に寝かせると、やっと私達を信用したとみえ、すやすや眠りました。翌日になって、もう一度住所と名前と電話番号を聞くとやっと教えてくれました。それから家内が家に電話するとお母さんが出て、二時間位後両親が迎えに来ました。するとその子は布団の中に隠れ、両親に会おうとしません。私はきっといつも両親にいじめられていたのだろうと思いました。

岡橋さんと私は一緒に「ひょうたん会」という勉強会を開きました。

「ひょうたん会」という名は「ひょうたんからこま駒」という諺からとったもので、異業種の人達が一堂に会して意見を言い合ううちに、思わぬ良いアイデアが出るかもしれないという期待から出た名前です。月一回の割合で十五人位の人達が集まり二時間位議論しました。各人から今自分が抱えている問題を提起し、皆の意見を求めるのです。良いアイディ

アが出るとは限りませんが、ひょうたん会でもアイデアが出なかった  
ということは、逆に本人にはそれ以降の自分の思考に自信が持てます。

普通勉強会は二～三回でつぶれてしまいましたが、岡橋さんが事務局を  
やってくれたお陰で十年以上続けました。

## その六 思考技術開発時代

コンサルタントやリサーチャーの仕事には、テーマごとの専門知識が  
必要なことは言うまでもありませんが、私はどんなテーマにも共通する  
思考のルールがあるのではないかと考えていました。私は日能総研で三  
～四年経った頃プロジェクトの進行に合わせて思考上の留意点を整理し  
総研の内部資料として「調査奥義」と題する小冊子を纏め<sup>まと</sup>ました。これ  
を新人研修のテキストとして用いました。これが私の生涯にわたる思考  
技術の研究のスタートとなりました。

これに続き創造力に関する研究会をコンサルタントグループの主だっ  
た人もメンバーに加え、十時<sup>ととき</sup>会長を委員長に据え、私自身はワーキング・  
グループのリーダーになってスタートさせました。そして約一年掛けて  
出来上がった成果を一冊の本に取り纏め、能率協会から「創造力革新の  
研究」として出版しました。

企業の中では、新製品開発の技術者が最も思考力を必要とする部門の一つなので、新人技術者を可能な限り速やかに育成することが各企業の課題でした。そこで東大の尾上名誉教授に委員長になっていただき、委員にはソニーや味の素などの一流企業の研究所長クラスの人達にお願いし、私はワーキング・グループのリーダーとなって二年間研究を続けました。その成果は「技術者教育の研究」という本になって能率協会から出版されました。いずれの本も、委員の方々に過度な負担は掛けられないのでワーキング・グループが執筆を担当しました。

次の段階は、水問題研究所になってからになります。デシジョン・システムという企業の幹部教育専門の会社との出会いから始まります。紹介してくれたのは、私と同じ年で深大寺の近くを流れる野川という川の環境を守ろうというNPO法人の代表（女性）でした。それはアメリカの水環境を視察するという目的の視察団に私も彼女も参加したことが縁でした。本論と全く関係はないのですが、私が視察中に大失敗をしてしまった話をさせて下さい。私は視察団とは別行動をとってグランド・キャニオンを観光し、その晩ロサンジェルスのホテルで日本で買ってまだ使ったことのない旅行用の電熱器でご飯を炊こうとスイッチを入れて、シャワーを浴びるために浴室に入ってしまった。浴室から出ると何

と部屋はもうもうと煙が立ち込めているではありませんか。原因はすぐ分りました。電熱器を上下逆さまに絨毯の上に置いてしまっていたのです。赤い絨毯は真っ黒に焼け焦げてしまいました。私は同室の彫刻家に相談しました。彼は、「こちらから弁償すると言ったらいくら請求されるか分らない。普段は見えないベッドの下から同じ絨毯を切り出してそれを貼って修理すれば、掃除のおばさんにはすぐには分らない」とアドバイスされました。さすが多摩美の彫刻の先生だと感心し、すぐ取り掛かりました。

何とか一見して分からない程度に修理できましたが、用心のために二人の旅行用のスーツケースを修理した部分に重ねて載せて絨毯の毛を寝かしました。ホテルの方は何日か経ってしまえば、何時の客かはわからなくなると思いましたが、帰国して何日間は心配でした。それにしても私はホテルに悪いことをしたと今でも思っています。この部分は余談です。

「野川を守る会」の代表をしていた彼女は、デシジョン・システムのテキスト等を印刷していて飯久保社長と親しかったようです。社長に紹介された私は、どこの人でも受講料さえ払えば受けられる一般研修を無料で受講させてもらいました。E・M法（エフェクティブ・マネジメント法）と称していましたが、アメリカのケプナー・トリゴー法を日本人

向けに若干修正したものでした。一般の企業人が業務遂行上必要となる思考の領域は四つあるとし、それぞれの領域ごとに思考のプロセスを細かいステップに分けて、それを分析シートとしてデザインしてありました。

五人位ずつに分かれたグループで自分達が抱えている問題・課題から研修で取り上げる問題・課題を選んで、分析シートに必要な情報を記入していくと自ずと適切な答えが出てくるという大変便利なシステムになっていました。

私は大変感動し、すぐにお手伝いさせて欲しいと願い出ました。私は水問題研究所の社長もしていて、常勤の社員は無理なので、非常勤の開発担当顧問という形で、デシジョン・システムに参画することになりました。勿論時間の許す限り他のインストラクターと同じ教材を使って富士通とか日立とか三菱総研などの新任課長研修なども行いました。ケプナー博士が来日した時には、現状のテキストの改善点について議論したり、ケプナー博士の講演会の前座として私が三十分位話したりもしました。

デシジョン・システムとの関係で忘れられない思い出は、青森大学が全国から日本語で議論の出来る留学生を十和田湖畔の同大学の研修所に

集め、二泊三日の研修会を開いた時、デシジョン・システムも講師として一部メンバーを出すことになり、私もその一員として参加したことです。二百人位の留学生を二十人位のグループに分けて、それぞれに講師が一人ずつ付き、与えられたテーマについて二日間議論し、三日目に講堂でそれぞれのグループが成果を発表し、審査委員が評価をして、東北大学長の西沢委員長が講評するというプログラムになっていました。

私のグループが与えられたテーマは、「真の豊かさとは」というものでした。当時日本はアメリカに次いで第二位の経済大国でしたので、留学生達は「日本は豊かな国だ、自分も国に帰って日本を目標に成長・発展に貢献したい」といったおざなりな意見が沢山出ました。それまで黙っていたアフリカのタンザニアから来た留学生が、「タンザニアは最貧国と思われているけれど、自分は日本人よりタンザニアの方が豊かだと思う。何故ならば、日本人の学生の眼は輝いていない。」 私はこれには一本取られたなと思いました。

私は司会者として、「日本のどの部分が豊かで、どの部分が豊かでないかを具体的に議論した方が建設的な結論に到達する可能性が高い」とアドバイスしました。すると次第に議論は深まり、翌日の発表会には十分だと私は判断し、模造紙に言いたいことの要点を整理させました。

最終日、私のクラスの発表の後、西沢審査委員長から大変お褒めの言葉をいただき、私に「何か補足することはありませんか」と言われました。それで私は次のような話をしました。よく手水鉢ちようずばちに彫り込まれている「吾唯知足」と、イギリスの経済学者が書いた「スモールイズビューティフル」と、ローマ・クラブが提示した「成長の限界」の話を分り易く説明しました。日本もゼロから、目指すべき国家像を再構築すべき時期に来ているのではないのでしょうか。

その後私は現在のE・M法だけでは部門横断的な大プロジェクトの担当者には十分ではないのではないかと考えるようになりました。営業担当の倉金常務をまず巻き込み、ブリヂストンの研修課長と係長にも参加してもらって「プロジェクト・エンジニアリング・コース」略してPECという新たなコースのテキストを書き上げました。そしてブリヂストンの部長クラスを対象に五日間コースでテストランしてみると、そこそこの手応えがありましたので飯久保社長も出席する開発会議はかに諮ると、何と社長は絶対反対で、私に協力した倉金常務は首という思わぬ展開になってしまいました。遂にPECは永遠にお蔵入りという運命になってしまいました。私は首にはなりませんでしたが、こちらから勝手に辞めてしまいました。

倉金さんは、各種の企業研修を売りながらP Sマネジメントという会社を立ち上げました。そしてP E Cを商品化したいと私に協力を求めて来ました。私は「喜んで協力する」と言って誘いに乗りました。私はそれまでの成果を「ホワイトカラーのプロジェクト・マネジメント」と題して生産性出版から出版しました。倉金さんの会社でプロジェクト・マネジメントを商品化するには、それを教えられる講師を育てる必要がありました。私はその時六十五歳で、その上胃ガン、食道ガンと続き体力が急に衰えて来ていたので現役の講師としては当てになりません。倉金さんは何人かの講師の候補者を見つけて養成に努めたのですが間に合いませんでした。倉金さん自身が睡眠中の無呼吸症候群という厄介な病気に罹り、会社自体を存続させることが難しくなっていました。

私はこのままでは勿体ないと、テキストそのもので博士号が取れないものかと考えました。当時千葉大学だけ社会人になってからの研究論文でも、教授が評価して相応の価値があるとされた場合には博士号を授与するということでした。私は建設省高級官僚の東大、京大での博士号取得のお手伝いをしてきた経験と千葉大清水教授からの「勉強させて貰います」という丁重な手紙から百パーセント博士号は間違いないと思っていました。しかし何時までたっても何の反応もありません。私は大学の

事務局に行って先生と連絡が取れないことを告げると清水教授から電話があり、「博士論文の審査を頼まれた覚えはない。」と人が変わってしまったような返答でした。私が「それではせめて提出した論文だけでも返してくれませんか。」と言うと、「そんな物はもうない、研究室に来られたら困る。」というけんもほろろの答えでした。私は頭に来て学部長または学長に訴えようと思いましたが、家内に止められて思い留まりました。

## その七 アート・サロン時代

日能総研を辞めて水問題研究所を始める頃、音大出の家内がやる仕事として、(株)フォーク・アート・サロンを設立しました。そしてこれまで自宅だった場所に四階建てのビルを建てました。二～三階は吹き抜けとして、中二階をつくり、音楽会などに適したヨーロッパ風のサロンの雰囲気を出しました。ビルの前面には、陶芸家の土肥満先生に女性のおっぱいやお尻をイメージした巨大な陶芸品を制作してもらいそれらを貼り付けました。建物が出来上がった当初は、建築家と陶芸家のコラボレーションとして「建築雑誌」に十ページ位のグラビアが載るなど一時話題になりました。

フォーク・アート・サロンという社名には、地域の人々が、一流の芸術に触れたり、自分達も参加できる気の置けないサロンという意味を含めました。家内は喜んで、毎晩のようにお客を前にして得意のソプラノを聞かせていました。お店はそれなりに繁盛していました。しかし私と家内との関係は次第に冷めていきました。家内がわたしに黙って車を買ってしまったら、野村証券セールスマンの口車に乗せられて、私にとっては多額の株式投資をしたら、その会社が暴落して大損をするなどの出来事が続いたからです。一方の私も、十数種のカルチャー・スクールの事務局として採用した女性に興味を持ち始めてしまいました。従業員に手を出すことは最もいけないことだとは知りつつも、気持ちがそちらに動いて行くことをどうすることも出来ませんでした。私の心の奥には自分の運転で私の母を死なせてしまったのに、反省することもなく新車を買って乗り回すという家内の神経に許せないものを感じていたのかも知れません。

私から離婚を申し入れると、予期していたように出て行きました。そして私は二度目の妻を迎え、アート・サロンを全面的に任せることにしました。私は四十一歳、妻は二十五歳でした。

ある晩、私の高校、大学の後輩と称する人がお客としてアート・サロ

ンに来ました。たまたま私は家にいましたので、会ってみると、私が一橋の時経営学の講師をしていた雲島先生の紹介状を持って「田中先輩から教えを請いに来た千葉大助教授の河野大機と言う者だ」と言います。私は三商大の発表会の前に「のんべー大学」という居酒屋でビールを飲みながら指導してくれたあの雲島先生が河野さんの大学時代には教授になられて、河野さんをゼミの学生として教えていたことを知りました。河野さんはその頃、バーナードやドラッカーのことを研究していて、企業のステーク・ホルダー（利害関係者）に大変興味を持っていました。それで大学時代の雲島先生の所に相談に行くと、「ステーク・ホルダーのことを世界で最初に本に書いたのは、君の先輩の田中さんだよ。」と言って私の「新企業分析入門」を貸して下さったといます。

私の企業の定義は

- ① 商品（サービスを含む）の生産及び販売を通じて
- ② 継続的に経済的利益を追求する
- ③ 各種人間集団の活動の場である

というものです。この各種人間集団というのがステーク・ホルダーのことで、株主、経営者、労働者、原材料供給者、部品の提供者、顧客が一般的です。私は各ステーク・ホルダーが満足できるだけの経済的配分を受ける

だけの収益を上げていれば、その企業は社会的存在価値があるけれど、そうでないか、そうなる見込みのない企業は、社会的存在価値がないものとなりました。

また社会的存在価値がある企業でも、収益の配分がどれかのステーク・ホルダーに片寄っていれば、不健全な企業とし、それらを数値で示すことを提言しました。雲島先生は私がこの定量化の部分にまで大胆に論を展開したことを評価して下さったのだと思います。河野さんはその後東北大学の教授になられましたが、「ドラッカーの研究」を出版した後脳梗塞で亡くなりました。

ちょっと堅い話になりましたが、アート・サロンの話に戻します。「アート・サロン百円コンサート」と称して、すぐれた音楽家の演奏を最低百円で聞けるようにしました。勿論それでは採算がとれる筈はありません。帽子を回して御満足いただけた分だけ百円に上乗せして入れていただくのです。アート・サロンの近くに千葉県文化会館がありましたので、そこでの本番に備えてのリハーサルをアート・サロンでやって下さるミュージシャンがいたり、武智さんという女性が、東京にある交響楽団に顔が利いて、そのメンバーからカルテットやソロで演奏会を開いてもらったりしました。N響、読響、日フィル、東フィルなどのメンバーが演奏してくれ

ていたので、千葉テレビに私も含めて数名が呼ばれ、インタビューを受けたりしました。一見アート・サロンは繁盛しているように見えたが、クラシック・ファンの方々はあまりお金を持っていないし、お酒もあまり飲みません。アート・サロンはお高くとまっていて、作業着や安全靴では入りにくいと、近くにあった旭建設の社員達から不満が出て来ました。

私は方針を変え、まずはお店の採算をとらない限り存続は出来ないと、<sup>なりふ</sup>形振りかまわず夜のお客さんを増やすことにしました。そこでとったのが「行商作戦」です。これは、出前とは異なり、女子従業員四～五人にコーヒーやサンドイッチやおにぎりなどを持てるだけ持たせ、近所の許可なく入れる新聞社などのオフィスを回り、仕事中の記者などに押し売りに近い方法で売ってくるのです。その際「私も出てますから仕事が終わったら飲みに来てね。」と愛嬌たっぷりに言わせるのです。

この作戦は効果があり、アート・サロンには居酒屋の雰囲気が出て来ました。そんな折息子が肝臓ガンになり、千葉大で手術を受けることになりました。私は水問題研究所を立ち上げて間もなく、自分の仕事で家に帰る日も少なかったので、やむを得ず、実の母親である前妻と今の家内に交替で病院へ泊りこみの看病を頼みました。誰が考えても不自然な取り合わせですが、二人共じっと我慢して波風立てずに看病を続けてくれました。特

に家内はアート・サロンの夜の勤めが終わってから、病室の床に敷いた簡易ベッドで寝るという生活はきつかったと思います。

息子はそれ以来入退院を繰り返すことになりましたが、フルートで受けた芸大を二度落ち、ジャズに転向して千葉では有名なジャズ・ピアニストの大原さんのバンドに入れてもらい、大原さんの店やホテルなどで演奏していたのですが、二十五歳で早世しました。

アート・サロンは昼間は県庁のお客さんを中心に七十人位入り、夜は新聞社のお客さんを中心に二十人位は入ってまあまあの収入があり、全額借金（五千万円）で建てたビルの返済も終わり、やっと一安心という時、家内が千葉で本格的な画廊をやりたいと言い出しました。私も水問題研究所閉鎖で被<sup>こうむ</sup>った五千万円も一匹狼時代や、デシジョン・システム時代で返済し終えたので、家内の新規事業の提案を承認しました。

西千葉に家内の兄が持っているビルがあり、そこを改装してギャラリーにし、アート・サロンⅡと名付けました。私と岡橋さんでやっていた「ひょうたん会」のメンバーの一人当麻さんが、日本やアメリカの有望アーティストをたくさん知っており、展覧会をやりたい人を見つけるのに苦労しませんでした。私は中学校の時に習った花田先生が光風会という画家の団体の理事をしていたので、恩返しも兼ねて画廊の最初の展覧会を花田先生

にしました。

画廊を始めると、作家の方から次々に売り込みがあるものです。うちはいわゆる貸画廊ではなく、展示作品の売り上げの何割かを頂くという企画画廊だったので、若手の育成が目的の一つとはいえ、売れそうもない作家ばかりでは潰れてしまいます。そこで家内と相談して応援する作家を絞りました。中国人作家の江屹さん、バングラディッシュの作家カジ・ギヤスディンさん、創画会の重鎮大森一夫さんです。勿論それらの作家の展覧会の間には、若手を中心にいろいろな作家の展覧会も入れました。

ある時多摩美の教授の展覧会のオープニング・パーティの席に、作家の友人の多摩美の先生方が何人か見えていました。私はお客様をおもてなししようと、ワインを注いで回りお客様と会話を楽しんでいました。すると何が気に障ったのか多摩美の先生が「画廊のおやじのくせに、生意気なことを言うな」と怒りだしました。私も頭に来て「多摩美の教授位で生意気言うな」と言い返しました。彼はドアをバタンと閉めて帰ってしまいました。作家は帰った友人のことを「彼には時々ああいう所があるんですよ」と言って私を慰めてくれましたが、家内はおさまりません。「うちは画廊なんですよ。何ですかあの態度は」と家内と知り合ってから初めて怒鳴られました。

二週間の展示期間に一枚も売れない作家もいます。私も家内もつかわいそうになって一～二点は画廊で買ってあげてしまいます。そのようにして買った絵が倉庫にいっぱいあります。絵を買って家に飾る、あるいは絵を収集して秘かに楽しむという習性はだんだんなくなってきているのだと思います。その原因の一つは、作家がアート・ファンを無視し、「アートは自分の心象風景を自由に表現するもので、売れることを目的とした絵は芸術ではない。自分の芸術は展示されている絵に全て込められているので、そこから汲み取ってくればよい」と主張しているところにあると思います。私はそれは正論だと思いますが、かのピカソですら、画商が来るとなると、どうしたら売れるかと女友達と二人で想定問答をしていたといえます。

私は美術館に飾る絵と自宅に飾る絵は内容が変わっても良いと思います。

私は自分の画廊としての経験から「アート・ファンの時代」という本を書きました。私は初心者向けに書いた積もりでしたが、逆に大森先生のようなベテランが「ギャラリー・トークで使わせてもらっている」とその価値を認めて下さいました。

結局はアート・サロンのギャラリー進出は、私と家内が知らなかった世

界を垣間見ただけで終わってしまいました。

本店であるもともとのアート・サロンは、私の妹とチーフに任せてありましたが、その立て直しに賭けることになりました。家内が暫くギャラリーの方に力を入れている間に本店のアート・サロンの方も次第に客足が遠のき、最早自力回復は無理と判断した時、ジャズのライブ・ハウスとしてホールを借りて下さる人が現れ、私共はそれは渡りに船とお貸しすることにしました。暫く賃料という安定収入が入りホッとしていたのですが、去年（二〇一九年）の十二月で賃貸契約を解除したいというテナントからの申し入れがありました。私は既に八十四歳だしこれは困ったと思ったのですが、家内が「あなたが九十歳まで生きてくれれば私が最後の勝負を若い人たちを入れてやってみせる」と言います。私は無為に死を待つ老後を過ごすより、自分で起こしたアート・サロンのお役に少しでもたてれば、その方が遙かに楽しいだろうとOKを出しました。二〇二〇年になって一～二月はたまたま大きなパーティが続いて、急にアート・サロンに活気が戻ったと思っていたら、新型コロナ・ウィルス対策として県から休業要請が来てしまいました。現在はその休業の真っ最中です。

## その八 リタイア時代

私は六十歳の時胃ガン手術をしてから何年かおきに食道ガン二回、咽頭ガン、口腔ガンと五回のガンを乗り越えて来ました。その間に病名は分かりませんが、脳神経をやられて半年位狂乱状態がありました。それを支え、優しく勇気づけてくれたのが家内でした。

まず全く泳げなかった私に水泳を教えてくださいました。彼女は中学校時代千葉市の大会でビリだったそうですが、カナヅチの私を指導するには十分でした。私は天気さえ良ければ市営の五十メートルの屋外プールに通い、調子の良い時には最高で四千メートル、平均で二千メートル位泳げるようになりました。

時々病気で中断されましたが、仕事も七十五歳くらいまで続けていました。普通のサラリーマンのように定年がある訳ではありませんから、クライアントが受け入れてくれる限り仕事はできました。ですから私の場合、何時からがリタイア時代なのかははっきりしません。たぶん七十歳位からだろうと思います。七十歳からヤマハ音楽教室でヴァイオリンを習い始めました。一年以内に「タイスのめいそうきょく瞑想曲」を弾くと心に決めて始めましたが、現実はそうは甘くありませんでした。意地悪そうな女の先生で、私の足を踏みながらリズムをとり、私がリズムを間違えると、「私足が疲れちゃう」と言いました。そんなレッスンを続けるうち、首の神経を痛めてしまった

のか、首を下に向けると両手が痺れるようになりました。外科病院に行くと、「年齢的にこれ以上ヴァイオリンを続けていると取り返しがつかないようになる」と言われてしまいました。やむを得ずピアノに切り替えました。家に家内用のピアノがあり、先生が家庭教師で来てくれていたので、私もレッスンを受けることにしました。バイエルから始めたのですが、先生はなかなかお丸をつけてくれません。私は先生の代わりに自分でお丸をつけて、先に進み何とかバイエルは卒業とさせてもらったのですが、その頃から楽譜が良く見えなくなり、肩もこり出したのでピアノは辞めました。ギターという選択肢もあったのですが、学生時代に大枚はたいて買ったギターは乾燥しすぎて、表面の板が破裂してしまっていて使えなくなっていました。残るは中学時代にやっていたハーモニカです。

六十年以上も離れていたハーモニカですが、C調のハーモニカを一本山野楽器店で買ってきて、昔覚えた「アメリカン・パトロール」という曲を吹いてみたら、意外にうまく吹けました。家内に「残り少ない人生なんだからいろいろな楽器を食い散らかすよりも、ハーモニカ一本に絞ってその奥義を極めたら」とアドバイスされました。それで私はハーモニカを独学で勉強いたしました。

本格的にハーモニカをやっている人は、十数本のハーモニカを使い分け

て、何調の曲でも吹きこなします。私にとってはそれは気のおおくなるほど困難に思えたので、全てC調のハーモニカ一本で、どんな曲でも吹ける方法はないものかと考えました。そして辿り着いたのが、「移動ド」という方法で何調の曲でも全てハ調に変調し、それでも残る半音の所は不自然にならないように編曲してしまうという方法です。こうしてC調のハーモニカ一本で演奏できるようにしました。すると両手がかなり自由になるので、左手と右手を重ねるオーバーラッピングで空間をつくった上で右手を閉じたり開いたりさせてヴァイオリンのようにビブラートをつけることができます。

この方法で演奏すると、これがハーモニカの音かと思われるほどきれいな音がします。私はこれで画期的な方法が開発できたと、世界のポピュラーな曲を家内と友人の協力を得てジャンル別に千曲近くCDに吹き込みました。CDで二十数枚にもなりましたが、それを車に乗る度に聞いています。二年前口腔ガンの手術をした時、医者に「完治してもハーモニカは吹けなくなるかも知れない」と言われて、六十曲ばかり選曲して吹き込み直し、二枚セットのケースに入れて、知り合いやお客様に配りました。

中学校の時の友人でハーモニカの名手だった折原君からは、「ビブラートが良く効いていて、単音がすごくきれいだ」と言われました。

幸い手術後も問題なくハーモニカが吹けましたので、アート・サロンのイベントのアトラクションとして演奏したり、希望者に教えたりもしています。

私のもうひとつの趣味は読書です。千葉市の図書館から一回に二十冊近く借りて（家内と二人のカードを使う）、一ヶ月位で読了します。ある時家内から「自分だけ勉強するのでは勿体ないから子供達が副読本として勉強できるような内容の本を書いたら」と尻を叩かれました。まず私が取り組んだのは、世界で、あるいは日本で歴史上尊敬できる人々はどんな人生を送ったのか、それらの人々に少しでも近づけるためには、どんな努力が必要かというテーマで八十人の偉人を取り上げ、毎年一冊ずつ四年にわたって自費出版しました。それらは市の教育委員会の許可を受け、市内の小・中学校や私の母校に配りました。

最後に取り組んだのは、百年後の人類はどうあるべきかという問題です。私なりの考え方は一応ありましたが、図書館から関連の資料をごっそり借りて来て、一年掛けて書き上げました。その中で強調したいのは、「ホモ・ルーデンス」という考え方です。これからの世の中はどんどん暇な時間が長くなっていきます。その時間をいかに楽しく過ごせるかが、その人の幸せに直結します。私達が若い頃は猛烈社員といって、会社に寝泊まりして

まで働くことがサラリーマンの理想像であり、本人の幸せにも通ずると考えられていました。これからは物が溢れ、A Iが人間の仕事を奪い、やりたくても仕事がなくなってしまう。少数の知的な労働者は仕事を楽しめるでしょうが、殆どの人々は、生活は保証されても仕事を楽しむという生活は送れません。

私は以上の五冊を毎年市の小・中学校に寄贈したことによって、市長から五年連続で表彰されました。

私のもう一つの趣味は旅行です。それも家内と二人だけで行く個人旅行が一番好きです。二人とも結構忙しい人生でしたが、そんな中でも何とか時間をつくって旅行をしました。外国旅行は四十ヶ国位、国内旅行は全都道府県、旅行とまでは言えませんが、千葉や東京の美術館、公園、音楽会場など、思い出がいっぱいです。アルバムだけで二百冊を越えてしまいましたので、残したい写真を選んでCDにし、寝ながらでもテレビで観られるようにしました。

## あとがき

毎日新聞が自分史を募集しているのを知って、〆切まで二週間ちょっとしかありませんでしたので、あわててこの小冊子を書き上げました。今年、もう少しで八十五歳になるという私にはかなりきつい作業になりましたが、正直いって充実した楽しい時間でした。その時々<sup>いきどお</sup>のことが鮮明にあるいはややぼんやりと思い出され、あらためて 憤<sup>いきどお</sup>ったり、にやにやしたり、涙を流したりして興奮の連続でした。

私の人生は平均的な人生よりも波乱に富んだものでしたが、うまく行ったと自慢できる部分はありませんでした。それでもいろいろな分野の一流の専門家と交流の機会を持てたこと、二度目の家内と趣味や生き方が一致し、私がどん底に落ちている時にも、私を支え励まして再起のきっかけを与えてくれたことなどを思い起こすと、幸せな生涯だったと思わざるを得ません。

私達夫婦には子供がありません。それだけにアート・サロンが私にとっては子供のようなものです。家内が四十代以下の三人の新しいスタッフの協力を得て、千葉の新しい文化の殿堂に再生してくれることを心の中で応援しながら期待しています。

本小冊子の中では、殆どの方が実名にしてありますが、リアリティを持

たせるために敢えてしたもので、万一本人が読んだとしても私は構いません。

本小冊子を執筆する機会を与えて下さった毎日新聞に感謝いたします。

(1位入選の30万円と出版という賞は逃しましたが)

## 著者プロフィール

### (略 歴)

- 1935年 千葉市に生まれる
- 1951年 千葉大学付属小・中学校を卒業
- 1954年 千葉県立第一高等学校を卒業
- 1958年 一橋大学商学部を卒業
- 1958年 日本精工(株)
- 1959年 公認会計士元吉重成事務所に転職
- 1961年 (社)日本能率協会に転職  
(企業に対するコンサルティング、国・自治体のプロジェクトのリーチに従事)
- 1972年 (株)フォーク・アート・サロンを設立 (代表取締役)  
(レストラン、パーティホール、カルチャースクールなど)
- 1975年 (株)水問題研究所を設立 (代表取締役)  
(建設省、国土庁、環境庁、東京都などからの委託にもとづき利水、治水、親水に関するリサーチに従事)
- 1984年 (株)デシジョン・システム、PSマネジメントの開発顧問となり、思考技術の開発、教材作成及び研究指導にあたる
- 現 在 アート・サロン代表  
(レンタルルーム、貸会議室など)

### (著 書)

- 「新企業分析入門」(白桃書房)、
- 「創造力革新の研究(共著)」(日本能率協会)、
- 「技術者教育の研究(共著)」(日本能率協会)、
- 「水問題を考える(共著)」(日本能率協会)、
- 「アート・ファンの時代」(近代文芸社)、
- 「ホワイトカラーのプロジェクト・マネジメント」(生産性出版)、
- 「尊敬する歴史上の人々」シリーズ4冊(自費出版)
- 「100年後の人類の在り方」(自費出版)

### (資 格)

- ・ 公認会計士三次試験合格
- ・ 不動産鑑定士二次試験合格